

狼少女、はじめました

唐野葉子

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

気がつけば身体は子犬、最初に目に入ったのは今にも泣きだしそうな金髪の少女だった。

どうしたの？ 何があったの？ なぜか放っておくことが出来ず、あいさつ代わりに頬をなめると、花が咲いたような明るい笑顔を浮かべてくれた。

——神様からもらった転生特典に戸惑いながら、ときどき現実逃避しながら、今日も今日とてぼくはフェイトの使い魔、『アルフ』として生きてゆく。

目次

前篇

1

後篇

43

先行公開『沁み渡る活字と車椅子の少女』

93

前篇

——ずっと、いつしよにいて

その声にこたえて、ぼくはここに来た。

憶えているかな？　それがぼくの存在理由。

きみが望んでくれたから、ぼくはここにいられる。

ぼくがそれを受け入れたから、ぼくは生まれてきた。

『I was born』じゃないんだよ。

それはきつと、他の誰かと比べられるものじゃないけれど……。

誰かに望まれないと絶対に生まれてこない。生まれることが出来ない。それは見方によつては道具と同じだけだ。

ぼくは自分の意志でここに来たんだ。それは素敵なことだと思うんだ。使い魔として生を受けたこと、後悔したことないよ。

……まあ、びつくりはしたけどね



身体がだるい。全身が重い。

まるで熱した鉛の粉末を肩から流し込んだみたい。たちの悪い風邪でも引いたのだろうか。

びくびく動くぼくの耳が、勝手に周囲の音を拾う。甲高い、子供の声が神経を逆なでする。五月蠅い。静かにしてほしい。少し眠らせて。

魔法の呪文のように続いていた、意味不明の言葉の羅列がふと途切れる。それと同時に頭蓋骨の奥まで真つ白な光が浸透し、全身を覆っていた倦怠感が嘘のように消えた。

なんだ、何が起きた？

目を開けると、小さな金髪の女の子が心配そうにぼくを覗き込んでいた。

どうしたの？ 何があったの？ 何故だか放っておけない気になる。

先ほどの声の主はきつとこの、目の前の少女だろう。七歳くらいだろうか。現状ですでに美少女の兆候がある、可愛い子だ。

霞がかった頭で違和感を覚えるも、正体がつかめない。あいさつ代わりに顔を寄せ、ぺろりとその頬をなめると、どこか泣きそうな、でも花が咲いたような明るい笑顔を浮かべぼくを抱きしめてくれた。

きゆう。

情けない声がぼくの喉から漏れる。

いくら第二性徴を迎える前のべったんな胸だろうが、強く押しつけられたら呼吸

困難に陥る。じたばたもがいて、ぶはつと肩の上に顔を出すことに成功すると、少女の肩越しに腕組みをしてあきれたような表情でぼくらを観察している女性を見つけた。

いや、あのやさしい眼差しは見守つていると言つた方が正確か。なんだか、保護者独特の温かいオーラをあの人から感じる。髪の色はこの子と違って茶色がかった黒髪だけど、お母さんのポジションにいる人なのかも。

ふう、なんだかほつとするな。一度呼吸を確保してしまえば、不思議とこの子の腕の中から逃れようとは思わなくなった。

薄らぼんやりとだけ記憶にある。ぼくは前にもこうされたことがある。冷たくて、寂しくて、消えてなくなつてしまひそうだったときに、こうやって抱きしめられたんだ。

この子の服もぼくの体もびしょぬれだけれど、あたたかい。

ぼくはこの子に救われた。唐突に確信する。

さらに追加して彼女の頬をなめ、尻尾を振つて感謝の意を示すと、彼女はくすぐつたそうに眼を細めてぼくの頭をなでてくれた。

……ん？ 違和感が。

——『尻尾を振つて』？

「ほら、フェイト。契約は無事成功したようです。その子も元気になったようですし、お風呂に入りましょう。濡れたままでは風邪をひきますよ」

黒髪おねーさんが何か言っているが、違和感の正体に気づいたぼくに気にしている余裕はなかった。

縮尺がおかしい。目の前の女の子が大きい。違う、ぼくが小さい。

……いや、それも違う。間違っではないいけないけれど正確じゃない。現実を認めよう。

ふさふさの尻尾。パタパタのお耳。ぶにぶにの肉球。

この体、犬だ。わんこボデイだ。

——狼だと後で知るのが、あちこちで大型犬扱いされるしもう犬でいいよね。

「うん、わかった。リニス、この子も一緒にいい？」

どうしてこうなった。

ようやくまともに動き出した頭で考える。

けしてこのままだと美少女と美女二人と混浴する羽目になる現状から逃避している

わけではない。ここに至るまでの過程を把握することが何より先決だ。

……ごめん嘘です。誰かたすけてー。



はじまりは、そう、帰宅途中に道路に飛び出そうとした子供を助けようとして、勢い余って車の前に飛び出してしまったことかな。

ドンツ　ぐるん　ぐしやり　どろー

(※見苦しい映像のため音声のみでお送りしております)

で、気がついたら目の前に神様を名乗る謎の存在がいて、『本来なら人を助けて死んだ奴は業を浄化されて無条件に天国逝きなんだけど、あの子あんたが助けなくても車に撥ねられなかったから助けたことにはカウントされないよん。よつて天国逝きもないよテラワロスwwww』て説明されてがっくりきたんだよね。

なにそれ。無駄死に？

ていうか、あれトラックどころか黄色いナンバープレートだったよね。小学生の手を引いた反動でたたらを踏んで道路に飛び出してしまったことといい、ぼくつてどれだけ貧弱……。

落ち込んでいたら『つーかあれ自殺つて処理されたから。地獄逝きですザマァwwww』トドメもきつちり刺されて。

そのあと言われたんだ。このままだと地獄直行で魂は廃棄処理されるけど、情状酌量の余地があるからチャンスをおいてもいいって。

転生の道を示された。

生まれ変わつてもう一度人生をやり直す。そこで善行を積み上げ天国に行けるようにする。さらにサービスで『転生特典』なる特殊能力を三つあげてもいいだなんて。

『そのまま逝つてもまた地獄逝きになること目に見えてますから。当然の処置ですプ

『ゲラwww』なんてのたまっていたけどね……。どこまで信用していいものやら。

まあともかく、当時の心がべきぼき複雑骨折だったぼくはその話を受け入れた。

天国や煉獄を経由した正規ルートじゃないから、完全とは言わないものの前世の記憶が残るということも呑んだ。

正直、もう一度人生をやり直すだなんて気が重い。つらいことばつかな人生だったわけじゃないけれど、もう一度やるかといわれて喜んで領けるほど楽しいものでもなかったから。

でも、地獄逝き、消滅だなんていう恐怖を受け入れることが出来るというものでもなかった。いざ消えるとなると、その実感はとても恐ろしい。

こうしてぼくは弱った心のまま転生特典をチョイスし、新たな人生をスタートしたのだった。

……そう、人生のつもりだったんだ。まさかのわんこ。

自分の中に意識を集中する。すると神様からもらった転生特典の情報が浮かび上がってきた。

▽

能力名：【比翼連理】

タイプ：パッシブ／タレント

分類：運命操作

効果：生涯にわたるパートナーを獲得する。

△

まるでゲームのステータスだ。これと一生つきあつていくのか。気が重い。

この「比翼連理」はぼくの心が弱つていた証明だ。自分のすべてを懸けた——それが意図的でなかったとしても——おこないが全否定されて、自分に自信が持てなくなり、頼りになる誰かに側にいてほしかった。

たぶんこれが、ぼくがここにいる理由。

今なら思い出せる。『生涯をともし過すこと』という契約に基づいて、ぼくがここに呼び出されたことを。

この転生特典の結果得たものが、今ぼくの体を洗つてくれている金髪の女の子——フエイトなのだろう。

「あん、もう、あばれちゃダメだよ」

はい、現実逃避の真つ最中でした。ごめんなさい。

それにしても『比翼連理』って辞書的な意味では男女、特に夫婦の関係で使われる言葉だった気がするけど……あのアバウトな神様相手に気にしたら負けか。

そう、ぼく女の子だったのだ。種族からして変わっていたので今まで気がつかなかっ

たのだが。混浴じゃなかった。

『フェイト、そのこ女の子みたいですけど、名前は決めましたか?』

『うん、アルフって名前にしようと思うんだけど、リニスはどう思う?』

『アルフ、いい名前ですね』

みたいな会話が目の前でなされてようやく気づいた。マヌケだと自分でも思うが、骨格や視界が人間の時とは違うことに慣れるので精一杯だったのだから勘弁してほしい。

もつとも、完全に犬の体というわけではなさそうだけど。犬は色弱だと聞くが、フェイトの金髪もリニスさんの黒髪も、うまいこと湯気に隠れて見えそうで見えない肌色桜色もきちんと識別出来ているし。

閑話休題。

ちなみにリニスさんというのは黒髪おねーさんのこと。フェイト同様、二人の会話から名前を把握した。

ぼくの生涯のパートナーになるであろう少女、フェイト。

フェイトの保護者的立場にいるリニスさん。

そしてとてもおながが減っているけれど、同時に眠たくて仕方がない子犬がぼく、アルフ。

ぼくは群れからはぐれて雨の中死にかけていたところを、発見したフェイトによって

助けられ、ツカイマなるものにされて命を救われた。

とりあえず把握できたのはこのくらい。気疲れが重なったのに加え、この体電池切れが早い。

「おや、眠ってしまったようですね。溺れてしまわないように早めに上がりましょうか」「はい」

なにはともあれ、ひとまずおやすみなさい。



はやいもので、ぼくがフェイトの使い魔になってからもうすぐ一年が経過しようとしている。

『ツカイマ』って『使い魔』のことだったんだね。ぼくが転生したのは夢と魔法の世界だったんだ。……いや、夢にあふれているかは微妙かな。結構シビアなところあるし。

ぼくが暮らしているのはその魔法の世界の中でも魔導文明の中心、第一世界ミッドチルダ——の南部の山間アルトセイム。自然が綺麗だよ。もともと、リニス先輩が家事全般を受け持ってくれているので不便は感じない。

というかりニス先輩マジで有能です。掃除洗濯炊事は言うに及ばず。フェイトとぼくに対する学問や魔法に関する知識——魔導物理に魔法知識に魔力トレーニング等——

—の教育と指導、加えて護身のための戦闘法の教官役。さらには人里離れたテスタロッサ家の物資補給も一手に引き受けている。

カレーが食べたいというぼくの**呟き**わがままを聞いて第九十七管理外世界からカレールーを取り寄せてくれたときは下げた頭が上がらなくなるかと思つたよ。

管理外世界とはいえ優れた文化はミッドチルダに流れ込んでくることが多く、カレーもその一つだから手に入れるのは比較的簡単だったとリニス先輩は笑つて言ってくれたけど、それでも、ねえ？

最近ではフェイトにあわせた専用のデバイスも作成しているらしくて……。先輩の生活に労働基準法が適用されたら確実にアウトだろう。

ぼくなんかボスの餌係——もといプレシア様の身辺のお世話だけでもストレスで胃に穴が開く。自信がある。

リニス先輩はどこでそれだけの技術を身につけたのか。不思議に思つて聞いてみたことがある。

『そのように設定、作成された』

ぼくがまだ幼いためか遠まわしに説明されたが、要約すればそのような内容だった。

—どうやら使い魔の性能はその誕生時に魔導師がある程度目的に沿って設定できるものらしい。能力が高ければ高いほどそれに比例するように存在維持に必要な魔力も多

くなるけど。

有能な使い魔の作成には魔導師側の一定水準以上の実力が不可欠。作成後も維持には少なくない魔力が消費され続ける。高性能な使い魔が魔導師のステータスになると言われる所以だ。

かく言うべくも、フェイトの使い魔である恩恵で高い演算能力や『電気』の【魔力変換資質】を持ち、覚醒時にはすでにミッドチルダ語を習得していた。フェイトやリニス先輩が日本語ではない言語で会話していると気づいたのはかなり後のことだったけれど……。思考自体は日本語でしていることが多いしね。

このミッドチルダ語は英語に酷似した言語で、時空管理局の影響下にある管理世界では交易共通語として使用され、複数の世界にまたがった統一言語としての立場を確立している至極便利なものだ。前世で英語の成績がよろしくなかったぼくとしてはこれが習得できたことが使い魔特典で一番大きかったかもしれない。

閑話休題。

そう、使い魔なんだ、よな……。

ことあるたびに考えてしまう。フェイトは死にかけて子狼を助けるために使い魔契約をした。結果、ぼくが生まれた。ここまではいい。少なくとも、ぼくにとってのマイナスは無い。

問題は、フエイトからみた場合。フエイトの目的は達成されたと言えるのだろうか？
確かにぼくには狼だったころの記憶がある。完全とは言えないものの、部分的にとはいえ思い出せる。しかしぼくには前世の人間だったころの記憶もあるのだ。

使い魔は本来、死亡あるいは死にかけの動物に目的に沿った人工の魂を憑依させることで作成する。あの駄女神^{ダメガミ}、いちいち転生されるのが面倒くさくってその人工の魂にぼくの魂を融合させて放り込んだんじゃないだろうな？

検証する方法は無い。でも考えてしまう。もしもその仮説が正しかったとすれば、ぼくは本来この場所で『アルフ』と呼ばれていたはずの誰かを押しつけてここに居座っているのではないだろうか。

フエイトが助けようとした『アルフ』を、ぼくが誰にも知られることなく消してしまっ
たんじやないのか？

だとしたら――。

やめだ、やめ。検証しようがないことどうだうだ考えていても仕方がない。ネガティブ思考は前世から受け継いだ持病の一つでいわゆる『死んでも直らなかつた』わけだから、一生付き合っていくしかないと半ば開き直っているが、自己憐憫に浸ることまでを肯定するわけではない。

何がどうあれ、今のぼくはアルフ。

今のぼくがアルフ。その事實は揺らがないのだから。

むしろ今悩むべきはもっと建設的なこと。最近行き詰ってきた魔法の修練に関することの方が優先だろう。

魔力が枯渇気味で気だるい手足を草原に投げだす。視線の向こうではフェイトが青空の中、空戦機動の訓練を続けていた。

はい、今日も今日とて現実逃避の真つ最中でした。

いやー、まさか自分が魔法使いになるだなんて前世では考えもなかったな。正確には魔導師だけ。

リンカーコアは独立しているためこっちの魔力の大量消費が向こうに影響する心配はないとはいえ、ぼくの存在維持にはフェイトの魔力を消費する。疲れた体に鞭打つて、ぼくは人間モードのままチャイルドいぬフォームに移行した。

「お疲れ様、アルフ。その姿もだいぶ馴染んできましたね」

「あ、リニス先輩……」

リニス先輩はちよつと苦笑した。ぼくが『先輩』の呼称をつけることにリニス先輩は少し抵抗を抱いているらしい。『なんとかなりませんか』と言われたことは一度ではないがどうにもならない。だつて自分はリニス先輩を尊敬しているのでありますから。

何度も問答を繰り返した結果、今では苦笑されるだけで特にそのことについて言われ

たりはしない。

「普通、フォームチェンジは熟練を必要とする高等技術だし、そもそも弱体化は覚えようとする使い魔が少ないんですけど、アルフは真っ先に覚えましてね」

「フェイトにかける負担は少しでも減らしたいですから」

成長すれば成長するほどぼくの能力は上がり、フェイトから供給される魔力は増えた。戦闘時は仕方ないとして、普段からフェイトにそのような負担をかけるのは心苦しい。

なんとかフェイトから奪う魔力をこちらから減らせないかと試行錯誤を重ねた結果、何度も体調不良におちいり、見るに見かねたりニス先輩が術式の改変技術を教えてくれたのだ。おかげで覚えるべきことが増えたが、今では人間モードでも狼モードでも自分の姿をフェイトとの契約当初に変形させることによって負荷を最低限に抑えることが可能になっている。

人に負担をかけることで自分の胃が痛くなるチキンハート憶病心も前世からの筋金入りである。

「あなたたちは本当にいいコンビですね」

リニス先輩の笑みが苦笑から微笑ましいものを見るようなものに変化した。何か変なことを言っただろうか。

アダルトおとなフォームの人間モードではもうリニス先輩の身長を追い抜かしてしまつたと

はいえ、まだまだリニス先輩には敵う気がしない。リニス先輩もまだまだぼくを子供と見ているようで、この間は犬用のおもちやをくれた。

……あれは反応に困ったなあ。いや、体は素直に喜んでるんだけど、尻尾とかぶんぶん振られているんだけど、中身はいちおう人間の記憶があるからねえ。無邪気にじやれつくのはちょっと抵抗が。しかし憶病心チキンハートに人様からのプレゼント——しかもよりによつて尊敬する人（使い魔だけど）からの——を放置するという選択肢が選べるはずもなく……。

まあ、童心にかえるのは楽しかったよ……。ふふふ。

あれ以来、人間モードでいる時間が長くなったが因果関係があるのかは秘密である。まあ、以前から狼モードでうろつくのは極力避けていたけれど。

あっちの方が出力は高いし、感覚も鋭いんだけど、総合面では人間モードの方が安定感があるし、やっぱり前世が人間だけあってこっちの姿の方がおちつくしね。使い魔特典で人間に変身できる機能がデフォルトでついていると知ったときから人間モードでいる時間の方が圧倒的に長くなった。

ちなみに、うちのフェイトさんがスカートを好んで履くことも狼モードを避ける大きな要因の一つだったりする。あの体、視界が低くて広いんだよ……。

閑話休題。

「フェイトの方はもう少し練習を続けますから、アルフは先にクールダウンして休憩しておいてください」

「……はい」

「落ち込まないで。あなたも十分すごいですよ。ただ、フェイトは高速機動に関しては天性の素質がありますから……」

そうは言われても気が落ち込むのを抑えきれない。

最近、ぶつかっている問題。

飛行訓練でまるでフェイトについていけないのだ。速度が違う。

無理についていこうとして魔力が枯渇寸前になるのもこれが初めてではない。

リニス先輩は無理についていくのではなく、ウィニングバック中後衛としてサポートに徹したらどう

かとアドバイスをくれるし、フェイトが苦手としている防御魔法や補助魔法に適性があるらしいのでその方向性でトレーニングを積むことに納得はしているんだけど。

いざというときに前線に飛び込んでフェイトの盾として活躍できるだけの何かしらは欲しいと思うわけでした。

でも速度で追い付けない現状では夢のまた夢である。たどりつく前にすべてが終わってしまう。

ちなみに余談ではあるが、ぼくには使い魔としては極めて珍しくデバイスを使う適性

もあるらしい。リニス先輩が驚いていた。デバイスを使うどころか作成できる規格外なりニス先輩に言われても実感は湧かなかったが。

まあ、前世が人間である影響かな、これも。



とほとほと帰路に就く。

ぼくだってがんばってはいないわけではないのだ。

この一年たらずで魔法は基礎から総合まで一通り覚えた。護身法だって習得した。デバイス使用の素質ありとはいえ、結局のところ自らの手足を使った戦闘法に一番適性があったので修めたのは格闘技だったけど。

飛行訓練だって『空戦』までは至っていないだけで、『飛行』ならそこそこ出来るのだ。使い魔の人工魂という下地があるとはいえ、なかなかの成果なのではないかと思う。

「いや、いいわけ、かな……」

届いていないものは届いていないのだから。

元が地上の生物だなんて関係がない。それを言うなら人間だってそうだ。

このまま中後衛ウイングバックとしての在り方のみを極めて、万が一フェイトが取り返しのつかない怪我でもしたら。

フェイトに、ここにいたかもしれない『アルフ』に、申し訳が立たない。

まただ、こんなことを考えて。

鬱屈した気分を吐き出すように深々とため息をついたとき、右肩に鈍い痛みとずしんとした重量が乗った。

「グギャー」

「……なんだ、お前か」

見ると、地球ではありえない四枚の翼を持った、カラスほどの大きさの鳥がとまっていた。ちなみに色は緑と青と赤の極彩色。ミッドチルダの生態系は摩訶不思議である。

顔見知りのひとりだ。自分の中の力に意識を向ける。

▽

能力名：【以心伝心】

タイプ：アクティブ

分類：法則支配

効果：対象の意志を翻訳・伝達する。

△

『コミュニケーション能力が欲しい』。

あの神様にそう願ったらももらえた能力だ。つまり転生特典の一つ。

ぼく個人としては【比翼連理】で得たパートナーと円滑にコミュニケーションをとる

手段及び保証が欲しかったのだが、得られたのはどのような相手であれ会話を成立させる能力。さすがに『意志を翻訳・伝達する』という効果上、相手が一定水準以上の自我を確立していることが求められるが。

ただ、そこに意志が込められているという裁定なのか、未習得の言語で書かれた本もこの能力を使えば読めたりする。魔法陣が解析できた時にはさすがに噴いた。

便利すぎるだろ。いや、悪い事じゃないんだけどさ……。

アクティブタイプの能力であるため、使用にはコストとして魔力が消費される。まあ、相手が鳥で世間話くらいならある程度回復してきた魔力で十分足りるか。

《やあ、姐御。なんだか落ち込んでいますなー。耳も尻尾もしおれていますぜ。またフェイト嬢ちゃんがらみですかい？》

《……まあね》

何故か此処ら一帯の動物はぼくのことを『姐御』と呼ぶ。……ぼくが狼だからだろうか？

リニス先輩が『リニスさん』で、ぼくが『姐御』なのはなんだか納得がいかないんだけれど。

《ひとつ、ここはあつしに相談してみやせんか？ 聞くだけならタダでやんすし、三步も歩けば相談された内容も忘れるトリアタマなため機密もばつちりつすよ》

《自分で言うなよ……》

くすつと笑みが漏れる。少し気が楽になった。

それに、相手はいわば空を飛ぶエキスパートだ。もしかしたら何かヒントになるかもしれない。そう思っただけで相談を持ちかけてみる。

《——なるほどねえ。……フェイト嬢ちゃんはあつしから見ても規格外ですぜ。それは姐御が十分すぎるほど理解しているとは思いやすが》

《そんなのわかつてるよ。あの子は天才だ》

《親馬鹿つすね》

《悪いか?》

《いいええ。いざというときに冷静な判断が下せるならそれもよござんす》

でも、のびのびと青空を飛び回るフェイトは本当に楽しそう。きつと彼女の中には元から空を飛ぶための素質が備わっていたに違いない。見るたびにそう思う。

天才ではないが天才に追いつくために一番わかりやすい手段は『努力』なんだけど……。フェイト、努力家でもあるんだよな。同じ練習量をこなすことさえリンカーコアの性能差でこちらが先にスタミナ切れになるので無理だし。

《ここらでフェイト嬢ちゃんが空で勝てる相手なんてもんはリニスさんくらいでやんす。でも、それは地上の姐御にも言えるので。それじゃいけないんですかい?》

『みんな違つて、みんないい』てか？ でも、うーん、やっぱりそうなるのかなー』
たぶんボス——プレシア様もフェイトやぼくに勝てるけどそれは置いておくとして。
相手よりも短い時間の鍛錬で相手の得意分野で追い付く、追い抜く——不可能だ。
だったら別のところで補うしかないんだけど。

確かに飛ばないことを前提とした地上戦ならばはフェイトと互角以上に戦える。
ここらの野生動物相手でも負けることはそうないだろう。

でもそんなの当たり前で。八歳そこらの女の子にそこそこ成長した狼が勝てるのは
当然だ。飛行しなければフェイトの戦闘スタイルの命綱ともいえる機動力が激減する
のだから。

逆にいえばフェイトの戦場は空が主流になるだろうってことで。

《中後衛でサポートに徹するしかないのかなあ》
ウィングバック

《姐御は健脚でやすが、まさか宙を踏みしめて走るわけにもいかないっすからねえ》
その瞬間、ぼくに電撃走る。

「その手があつたかあ！」

「ピギアア!？」

突然の大声に驚いて肩の上から鳥が飛び立ったがそんなことはどうでもいい。

どうして思いつかなかつたんだろう。『宙を踏みしめて走れば』いいんだ！

《あ、姐御？ 当然どうしたんで？》

《ありがとう、道が見えた気がする》

おそるおそる話しかけてきた鳥に礼を言い、さっそくひらめきを試す。

この世界の魔法はデバイスにプログラムを走らせて起動するスタイルが主流だが、ぼくら使い魔はたいていデバイスを使用しない。そもそも、今ぼくが思いついたのはデバイスを使わなくても使用できる者が多い魔法だ。

まずは飛行魔法で宙に浮き上がる。『飛行』のプロセスは上出来。続いて空戦機動に移行。

従来なら速度が足りず、小回りも利かず、無駄に魔力を消費するだけだった動き。しかし今は違う。

「[サウンドシールド]。シールド系防御魔法に分類される魔法で、リニス先輩から習った基礎の一つだ。基礎だけあって多くの魔導師が使用しており、展開速度が速くデバイスなしで使用できる者が多い簡単な術式。その割に防御力が高く、コストパフォーマンスもいい。

一方向の防御しかできないという性質を持つものの、今は防御に使うわけではないので問題ない。本来、魔法弾を防ぐことに真骨頂を発揮する魔法だが、物理攻撃も防げないわけではない。

イメージするのは水泳のクイックターン。展開時はぼくを中心に座標を設定。しかし展開後はぼくから切り離して座標を空中に固定。

「っしー」

狙い過ぎず、ぼくの足は展開したシールドをしつかり捉え体を反転、加速させた。

狙い通り！ 『防御魔法を移動目的で使う』という試みはうまくいったようだ。

思いついてみれば簡単なこと。シールド魔法を空中に固定し、足場として利用する。【ラウンドシールド】なら使い魔の性能を駆使すれば無詠唱で連続複数展開できるし、狼の身体能力も存分に生かせる。

展開したシールドを踏みしめるたびに歓喜で体が踊りだそうとする。飛行魔法とバリアジャケットで緩和されているとはいえ十分な量の風が耳をはためかせる。気持ちいい。今まで思い通りにならなかつた空戦機動がこんな形で達成できようとは。

跳ねあがったぼくのテンションはおよそ三分後、魔力の完全枯渇で墜落するまで下がることは無かつた。



身体に躍動感が満ち溢れる。歓喜のあまり頭がぼーつとする。

いや、なんだが手足もしびれているような……。

《あ、姐御ー！》

ああ、そういえば、魔力枯渇寸前だっけ。

いつの間にか空が足元にあるぞ？ ああ、ぼくが頭から地面に落ちていつてるだけか。

……………。

「っは！ 夢!？」

「夢じゃないよアルフのバカア!!」

いきなりフェイトに怒られた。なんぞ？

なんで涙目のフェイトが枕元に立つてるんだ。とりあえず泣かない泣かない……。

「目が覚めたようですね？」

氷点下、いや、絶対零度の声でした。

り、りにせんばい？ その笑顔がマジで怖いんですけど……。

「私はちゃんとと言いましたよね。『先にクールダウンして休憩しておいてください』つて。それが何故脛骨を折りかねないあのような状況につながったのか、説明をお願いできませんか？ ア・ル・フ☆」

ちよ、ま。最後の☆がマジでヤバい。命の危険を感じるって言うか寿命がゴリゴリ削れていつてる気が——。

「寿命が縮まったのはこっちの方ですよ」

なんで考えていることわかんの!?

「表情に出ています。……ふう、まったく。頭から墜落したあなたを見て、フェイトがどれだけ取り乱したかわかっていますか?」

すつと頭が冷えた。

枕元でうーと涙目で唸るフェイトを見る。ここまで感情をあらわにした彼女を見るのは、前にお風呂でおぼれかけて以来かもしれない。

こういう言い方は好きではないが、フェイトはいわゆる『手のかからない子』だから。迷惑をかけない。わがままを言わない。リニスの言うことに従って、ボスの意向をくみ取って、この年頃の子どもにはあり得ない鍛錬を日々積み続ける。

精神リンクでフェイトから伝わってくる怒り、悲しみ、不安、安堵……。ぼくは彼女をこんなにも傷つけてしまったのか。どうすればいいのかわからなくて、視線が宙をさまよう。

「こういうときはなんて言えばいいでしたっけ?」

リニス先輩の助け船をもらって、ようやく言うべき言葉が喉の奥から転がり出た。

「ごめん、なさい」

一度見つけてしまえばあとからあとから言葉と感情が溢れてくる。ごめんなさいフェイト。ごめんなさいリニス先輩。ごめんね、ごめんなさい。気がつけばぼろぼろと

涙があふれていた。心のどこかで剥離した部分がいい年して情けない、だなんてほざいているけど、この体はまだ一歳にもなっていない。

「……アルフの、ぼか」

「私たち魔力で身体を構成した使い魔にとつて、魔力の枯渇は他の生物に比べずっと致命的な状況につながるりやすいんです。今後は注意してください」

フェイトの腫れた目元やかすれ声が罪悪感をぐさぐさ刺激する。

ぼくは何をやっているんだろう。生まれてきたことに罪悪感を感じて、不安を消すために無茶をして、迷惑をかけて。

こんなに声がかすれるほど泣いてもらえるくらい、ぼくは愛されているというのに。ずっと自分ばかりしか見ていなかったんじゃないのか。フェイトのため、ここにいながらも shouldn't 『アルフ』のためだなんて建前を自分で信じ込み、気がつかない裏側で自分が必要とされる理由を探していた。

此処にいていいんだって、フェイトとリニス先輩に言っただけだった。なんて救いようのないバカなんだろう。

そんなのとつきの昔に言われているのに。ぼくは必要とされたからここにいていいのに。理解しているつもりで、本当の意味で気づいていなかった。

しばらく壊れたオルゴールのように何度もごめんなさいを繰り返すぼくの頭を、リニ

ス先輩は何も言わずに撫でてくれた。途中からは小さな手も、怒っていますと主張するようにはいささか乱暴だったが加わった。

「……さて、フェイトもアルフもだいたいぶ落ち着いたようですね。反省はそこまでにして、聞かせてもらえませんか？」

思考の海に沈んでいた意識が引き戻される。視界がかすんで目元がひりひりする。こんなに泣いたのは久しぶりだった。

頭の上から離れていった二つの手が名残惜しい。

「……ぐす、な、何をですか？」

「あなたが落ちた理由です。空でいったい何をやっていたのですか？」

そういえばそうだった。ぼくが落ちたのは魔力枯渇が原因だが、そもそもその発端は空戦機動の成功にテンションが天井知らずに高揚して疲労を感じ取れなくなったことだろう。

ぼくは空戦機動にいちおう成功したこと、その際にシールド魔法を足場として活用したことをリニス先輩に説明した。

リニス先輩が感心したような表情で頷く。

「なるほど、純粹かつ単純なアルフならではの発想というやつですね。確かに空中に足場を用意出来れば、使い魔の身体能力があればフェイトの速度についていくことも可能

でしょう」

「あ、あの、なんか今の発音変じやありませんでした？」

「フェイトを泣かすような使い魔はアルフでじゆうぶんです」

はい。ごもつとも。二度といたしません。深く深く反省した。

「その手段に『ラウンドシールド』というのも面白いですね。まだまだ改善の余地はありますが、基本構想としては……。アルフ、中後衛はやめて前衛に集中したいですか？」

「いえ、基本的に空戦ではフェイトのサポートに回りたいと思います。ただ、射撃魔法はあまり得意ではないのでいざ攻撃や壁を担うことになった時、これという手札が欲しかったです」

フェイトの使い魔であるぼくは間違つても魔力保有量が少ないとかそんなことは無い。ただ、元が狼である弊害なのかぼくの性分なのかはわからないが、射撃魔法の精度、威力共にフェイトのそれより大きく劣るし、魔力を大量にばらまくような射撃、砲撃系の魔法はそもそもあまり好きになれなかった。

牽制、攪乱を重視して「フォトンランサー」をはじめとした射撃魔法には着弾時炸裂効果を付随してみたりしているが、それも射撃、砲撃が充実し、それに伴い防御手段も充実しているミッド式魔導師相手では決め手にはなりえない。やはり得意の格闘戦を生かすことのできるカードが一枚欲しい。

それに汎用性をうたうミッド式とはいえ、戦闘は充実している射撃、砲撃魔法をメインにした中々遠距離戦闘が主流になっていく感は否めない。相手の懐に飛び込み格闘戦に持ち込めば、それだけで相手の手札を制限し有利な状況に持ち込めることが多いのだ。

身体強化と近接戦を主眼に置いた『ベルガ式魔法』なるものも存在するらしいけれど、これは使い手がかなり少ないらしいし、現在ミッド式を下地にベルガ式を再構築する研究が行われているが、これもリニス先輩の見立ていわく実用までに十年はかかりそうとこのことで深く気にする必要は今のところないだろう。

とはいっても、このままフェイトにサポートとしての実力を伸ばすことについては何の異論もない。

どうもうちのフェイトさん、攻撃に傾倒し過ぎというか、『当たらなければどうということはない』を地でいくバトルスタイルを確立させつつあるっぽいんですね。この子を何の援護もなく戦場に放り出すなんて怖くてできそうにない。いや、そもそも戦場に出てほしくないのが正直なところだけけど。

「……そうですか。それではその方向性でトレーニングメニューを調整しますね。せっかくアルフが体を張って編み出してくれたわけですし、シールド魔法を移動に使用する手法も少し洗練させてみましょう」

しばらく考え込んだ後、リニス先輩はにつこり笑って頷いた。……もしかしてリニス先輩、けつこう根に持つタイプですか？

そこまでは落ち込みながらも冷静に聞いていたぼくだったが、続く一言でいつきに焦らされることになる。ちなみにぼくらの会話をすこし膨れながら聞いていたフェイトはそれを聞いて笑顔になった。

反省はしているからそんな顔はやめておくれよお。

「さて、お話はここまで。みんなでお風呂に入りましょうか」

「ふうえ?!」

「なんせ訓練が終わってすぐアルフの看病でしたからね。女の子は綺麗にしていなきやいけませんよ？ そのあとはみんなでマッサージしましょう。疲労が残っては大変ですから」

「うん、わかった。いこう、アルフ」

フェイトがぼくの手を引いて黒い笑みを浮かべる。こんな小さい子になんて顔をさせてしまっているんだぼくは……。って現実逃避している場合じゃなかった。

待って、君たちは誤解をしている。たしかにぼくはお風呂に入っている時に落ち着きがないよ。早く上がりたそうにそわそわしているよ。でもそれはお風呂が苦手とかじゃなくて……。

前世の記憶が残っているから女性と入るのがキツイんだよ！ 性欲とかは感じないものの、気恥ずかしさが半端ない。さすがに前にフェイトがおぼれかけて以降はフェイトを一人で入浴させないようにしているものの、リニス先輩と入るのは精神的に大ダメージを負う予感しかない。ただでさえ最近是人間形態の自分の体を直視することに気疲れがひどいっていうのに。しかもそのあとマツサージって。

「ほら、いこうよ」

しっかりと握られた小さな手はいろんな意味で振りほどけない。

望んでこの上ないはずの少女の笑顔が死神の微笑に見えた瞬間だった。ちなみに鎌が振り下ろされる先は魂じゃなくて、倫理道德とかプライドとかそこらへんね。



あの後、リニス先輩はしばらくしてからぼくに専用ストレージデバイスをくれた。

盾型ストレージデバイス『ペルタ』。普段は銀の首輪形態で待機していて、起動すれば左前腕部に三日月形の盾が展開される。大きさは空戦機動や格闘戦の邪魔にならないように小さめ。

『ストレージデバイスですからそこまで手間がかかっているわけではありませんよ。それに、どうしてもバルディッシュの制作がメインになってしまいますから』なんて言っていたけれど、シールド魔法の高速同時発動、並列運用の処理速度、精度はたいし

たものだ。ペルタが防御魔法に特化したデバイスだということを差し引いてもそう感じる。

インストールされている移動用シールド魔法——通称「タンバリン」もリニス先輩が「ラウンドシールド」を元に展開時の大きさ、性質をある程度変化させることが出来るよう改変した半オリジナルである。

本当にリニス先輩には足を向けて眠れないよ。

覚えるべきことがさらに多くなり、トレーニングは密度を増したが後悔はしていない。やらなくて後悔するよりはやって後悔した方が百倍マシだ。こんな考え方は前世では絶対しなかつたので面白い。

フェイトと共に日々レベルアップを重ねて順風満帆。まあ、目下の悩みごとは最近なぜだかフェイトの生き霊が見えるようになったってことかな？

《生き霊じゃない！ ア・リ・シ・ア！》

はい、いつものごとく現実逃避中であつた。

今、ぼくの前では半透明全裸のフェイト五歳児バージョンがぶかぶか浮かんでいる。ふと見かけて、「フェイト？」と話しかけてしまったのが運の尽き。《わたしのことが見えるの!?!》と憑かれてしまった。

こうしてよくよく観察してみれば表情豊かなふくれっ面といい、快活な雰囲気といい

フェイトとはかなり違うんだけど。おもいつきり別人だ。

ちなみに全裸についてはようやくここ最近耐性がついてきた。一年近くかかった……。顔色も変えずにフェイトの髪を洗ったり背中を流したり身体を拭いたりできるようになったのはいいんだけど、何か大切なものを失くしてしまった気がしないでもない。

《もう、そんなんだからアル^バフ^カって言われ——》

言葉が途中で断ち切ったかのようにふつつり途切れる。半透明の身体も視界から消滅した。

……ふむ、やはりか。アリシアと名乗ったフェイトもどきの少女を認識できるのは【以心伝心】を使用中のみらしい。別にバカって言われたから聞こえなくしたわけじゃないヨ？ 確認しただけです。別に突然靈感に目覚めたとかそういうわけではなかったらしい。

今まで【以心伝心】を室内で使用することって滅多になかったからな。せいぜい未習得の言語で書かれた本を読むのに使ったくらいで、それもリニス先輩からの言語学習が進むにつれて使わなくなったし。

アリシアがテスタロッサ家内のみで発生する自縛霊のようなものだとしたら、今まで目撃できなかったのも不思議じゃないってことか。ちなみに今回は窓から鳥が遊びに

来て、それと会話するために「以心伝心」を使いアリシア発見の流れに至った。

……それにしても、便利すぎるだろう【以心伝心】。コミュニケーション対象が幽霊なら靈感獲得も『意志の翻訳・伝達』の範疇に含まれる裁定なのだろうか。なんだかんだいつて神様からもらった能力だけある。

考察を終え、「以心伝心」をふたたび発動させると、アリシアが泣きそうになっていた。フェイトと同じ顔でそんな表情をされると罪悪感が募る。確かに突然無視した形になつたわけだし、謝罪はするべきだろう。

《おい、アルフ^{バカ}？ 返事をしてよー。ねえ、バカー？ バカバカー？》

「誰がバカだバカつて言うやつが一番バカなんだよバカー！」

スキル【幼児退行】発動！ 特に転生特典とかではない。

正体はともかく見た目五歳児に馬鹿にされるのがここまで腹の立つことだとは思わなかつた！ 『アルフアルフ？』みたいな感覚でバカバカ言つてんじゃねえ！

この体、思いもよらないところで沸点が低いなーとどこか冷静な部分がつぶやく。見ていないで止めてほしい。

《なつ、その理論ならあなたも一番バカじゃないバカー！》

「じゃあ同列一位だよばーかばーか！」

《バカーバカーバカー！》

——見苦しい光景のため中略。しばらくお待ちください——

十五分後、そこには息絶え絶えになったばかりの姿があつた。……本当に何やつてんだか。

「はあ、はあ……やめよう、不毛だ」

《ぜえ、ぜえ、そうね……》

疲労困憊の末、休戦協定が結ばれたのであつた。どうでもいいけど幽霊も疲れるのね。この場合は気疲れかも知れないけれど。

なにはともあれお子様モードは終了。真面目な話し合いへと移行する。

「……アルフ？」

「つしい、フェイト、そつとしておいてあげなさい。あれは麻疹みたいなものですから。ふふ、アルフもそんな年頃になつたのですね」

と思つた矢先、なんか遠くの方でフェイトとリニス先輩がこちらを見ていた。

フェイトが摩訶不思議なものを見る目でこちらを見ていた。

リニス先輩が微笑ましいものを見る目でこちらを見ていた……。

……嗚呼、あれだけ大声を出していたら何事かと見に来るのは当然だよね。

状況説明、アリシアと言ひ合ひしていたら何事かと見に来るのは当然だよね。仮定、高確率でアリシアはぼく以外の人に見えない。結論、誰もいない空間に向かつて馬鹿馬鹿叫んでいたぼくの姿がそこ

に。

あの、リニス先輩？ その『私はわかっていきますから』みたいな表情で頷くのはどういう意味でしょうか。フェイトの肩抱いてどっか行かないで。言い訳させて。

《……えーと、大丈夫？》

「……………ごめん、ちよつと待って」

精神的に立て直すまでもう少し時間がかかりそうだった。

——さらに十五分経過——

「おまたせ。さあ、話を聞こうか」

《おお、立ち直った》

今いろいろ掻き集めて蓋をする作業が終了したばかりだから、蓋をずらすような発言禁止ね？

閑話休題。

「君は誰だ？」

《相手の名前を尋ねるときはまず自分から。礼儀のなっていない使い魔ね》

「——これは失礼いたしました。ぼくの名前はアルフと言います。お名前をうかがってもよろしいでしょうか？」

《だから最初にアリシアって言ったじゃん。アルフってバカア？》

「……ぼくは真面目に話したいのだけれど?」

《ごめんごめん。久しぶりの話相手だからつい、ね》

アリシアはぺろりと舌を出した。フェイトではまず見られないであろう、いたずらつ子のような笑顔だ。

その笑顔がすつと外見不相応な真剣なものに変わる。それは、彼女がその幼い姿のまま長い年月を過ごした歪さ、そして悲しさを感じさせる光景だった。

《わたしはアリシア——アリシア・テスタロッサ。フェイトのお姉さんだよ》

彼女はそう名乗った。声に今までとは打って変わった決意をにじませて。

ここまで似ていて、フェイトの肉親だということは予想していなかったわけではない。でも、フェイトに姉がいたなどという話は聞いたことがない。幼いフェイトに話すことではないと姉の死を秘密にしているのだろうか。そう考えると自然だが、なにやら嫌な予感がした。

それは前からうつつすらと感じていた違和感。フェイトから聞かされるボスの過去と、現在の食い違い。リニス先輩からこつそり教えてもらったボスが『娘』に向ける愛情と実際のフェイトへの態度。それほど多く顔を合わせたわけではないが、どこかまでもはない空気を背負い、しかもそれが時を重ねるごとに顕著になってゆくボスの姿。

アリシアという存在は今まで隠されていた違和感の正体を完成させてしまう最後の

ピース。本能がそう告げている。生まれて間もなく使い魔になったのだから野生の勘などとはお世辞にも言えないシロモノだが、経験的によく当たることは知っていた。

「フェイトにお姉さんがいたなんて話は聞いたことがないけどな？」

我ながら声が固い。アリシアは悲しそうに微笑を浮かべた。

《そりやそうかな。わたしが死んだのは、もうかれこれ二十年近く前になるから。……

だからこう見えて、中身は二十歳を超えた立派なレディなんだよ？》

「見かけは幼女だけどね（しかも素っ裸）」

《幼女はあんたもでしょうが！》

軽口に乗ってはみたものの、気分は晴れない。ちなみに今のぼくはチャイルドフオーム人

間モードである。

二十年。『近く』ということで誤差で数年と考えれば、使い魔になる前の生前のリニス先輩がぎりぎり知り合いかもしれないというところか。

人が変わるには十分な時間だ。

《こうして話が出るのも何かの縁だし、お願いを一つ聞いてくれないかな？》

「唐突だね」

《わたしがこれから話す情報の対価ってことでどう？ ただであげるには少しばかり重

たいものだから》

「……何を頼まれるか、聞いてからでいいか？」

アリシアは目を閉じた。まるで何かを覆い隠すかのように。まるでどこかから目をそらすように。誰かに祈るように。奇跡を願うように。助けを乞うように。

最後の覚悟を固めるかのように。

《お母さんを、止めて》

目を開いたとき、ぼくらの世界は決定的に変わった。

聞かされたのはぼくの予想を、覚悟をあざ笑うかのような『真実』。

『プロジェクトF. A. T. E』使い魔を超える人造生命の作成と死者蘇生の研究。娘を失った母親が狂気に駆られるように立ち上げ、不完全ながらも形にした、その結果が『フェイト』。ぼくの大切な（主人さま）。

アリシアはずっと母親を傍で見守ってきた。狂気に軋む母を、透ける手で抱きとめようと、届かない声でいさめようとしてきた。狂気に軋む母を、透ける手で抱きとめようとし、届かない声でいさめようとしてきた。

違和感の正体は、これだったんだ。

ボス——プレシア（話を聞いた後ではもう『様』はつけられない）にとって愛する『娘』はアリシアのみ。『フェイト』はただの失敗作。だからあんなにも冷徹に接してきた。日々鍛錬を積ませたのは、どうせ偽物ならせいぜい手駒として役立てようとも思っただ、か？

ふざけるな。

「……止めることに異論はない。でも、どうすればいい？」

《わたしの意志をお母さんに伝えて。もうわたしを生き返らせようとしないのでって。フエイトと一緒に幸せに暮らしてって》

「ぼくが言っても納得しまい」

《わたしとお母さんしか知らないことを話すよ。それで信用してもらえれば……》

「それでもだめだ。どこかで知ったに違いないって思いこむだけだと思う」

怒りはある。でも、それ以上に恐怖を感じる。

怖い。理解できない。プレシアの生活はリニス先輩から伝え聞くところによると研究重視の心身をすり減らすようなものだ。それがアリシアという失った娘を生きら選らせるためだとするなら二十年間続けていたことになる。

大切な娘だったとかそんな問題じゃない。どう考えても狂気の沙汰だ。そんな相手に他人が言葉でなにを言ったところで通じないだろう。

《じゃあどうしろって言うのっ。わたしじゃ何を言ってもお母さんには聞こえないのに！》

激高したアリシアの言葉がパチンと脳裏に当てはまる。

「ああ、その手があったな」

《え？》

「アリシアに直接説得してもらおう」

《で、できるの、そんなこと？》

おおよそ二十年のあいだ不可能だったことをあつさり言われ、アリシアは不信以前に困惑している様子だった。

ここは夢に満ち溢れているとは言い難いけど魔法の世界。リニス先輩に基礎から総合まで一通りは仕込まれている。

「補助魔法のひとつに『念話』という魔法がある。リンカーコアさえ起動していればデバイスなしで誰にでもできる基礎中の基礎なんだけど……。『情報を送る』という括りでいえば視覚映像や聴覚映像を送るのもそこまで変わらないんだ」

もともと情報の種類や量によってそれなりにしつかりと術式は組まないといけないけれど。消費魔力や手間暇を考えれば視覚情報や聴覚情報はそれ専用のマジックアイテムを使った方がお手軽なので『念話』以外はあまり使われていないし。

だけど基礎知識としてリニス先輩にはしつかり習っているし、使い魔の能力があればプレシアの前で一から術式を組むことも可能だろう。魔導師としても優秀なプレシアだ。種も仕掛けもないことは見て理解できるはず。

何より、狂気にとらわれるほど愛していた娘を、母親が見紛うはずがない——と信じ

たい。狂気にとらわれるあまり信じられないという可能性は見て見ぬふりをした。

あとは「以心伝心」と並列で魔法を使用となるとぼくの魔力が保つかどうかという問題だけだ……そこは気合いでなんとか最後まで保たせよう。

それにしても、とふと思う。

◆ この世界の魔法、難易度設定間違っていないか？

後篇

額から脂汗が流れだす。足の感覚がもうない。

どうしてこうなった。何度目になるか分からないぼやきを声に出さずに漏らした。

ごめん、フェイト、ぼくはこの部屋から生きて帰れないかもしれない。

《もう、リニスがあれば言ってくれているんだからとつとと病院行ってよね。お母さんが倒れたら困るのはフェイトなんだから。あんまりリニスに迷惑かけないで。お母さんは全般的にリニスに頼り過ぎ》

「はい、すみません……」

《誤っているひまがあつたら病院に予約入れる。今すぐ！》

「は、はい。ただいま！」

ピ・ポ・パ・ポ・ピ（予約完了）

《そ・れ・に、お母さんはフェイトに甘えすぎだよ！ 生きる目的は私に押し付けて、フェイトを否定することで精神の安定を図って、いい年なんだからそろそろ一人で立つたら！》

「で、でも、私はアリシアのために……」

《な・あ・に？ 言い訳するの？》

「ご、ごめんなさい……」

アリシアさんのスーパ―お説教タイム。ぼくの中ではさつきからプレシアの印象が現在進行形で変わりまくりです、はい。

おつかしいなー。開始十分は感動の母娘の対面だったのに、ほんとうにどうしてこうなった？ 懸念した破局もなくプレシアはアリシアを認め、アリシアも触れられない母の胸に飛び込んだのに……。話を続けるうちに二十年近く狂気の研究を傍で見ていることしかできなかつたアリシアの鬱憤が噴出してしまったみたい。

ああ、どうしてぼくは雰囲気飲まれて正座なんてしてしまったのだろう。しかもそのうえでアリシアに意味を聞かれたときに『お説教を受けるときの正式な座り方です』なんて答えてしまったのだろう。

おかげで正座させられているプレシアから時々向けられる視線が怖い。慣れていないのに加え、いい年だから——今プレシアから向けられた視線に致死量の殺気を感じた。女性に年齢ネタは地雷らしい。プレシアが正座している手前、ぼくだけが胡座をかく度胸などあるはずもなく。

《ああ、またよそ見して。ちゃんと反省しているの？》

「ひい、ごめんなさい。反省してます……」

《声が小さい!》

「反省してます!」

ほんと何これ。仁王立ちしている半透明全裸幼女の前に並んで正座している、白衣のマッドサイエンティストとその娘の使い魔こちらも見えた目幼女。シユールな光景にもほどがある。

うーん、ていうか。フェイトはアリシアのクローンなわけだから姉妹というより親子の方が近いんじゃない。だったらフェイトの娘みたいなものぼくにとったらアリシアはおばあちゃ——ひっ、アリシアの視線が! 学習しようぼく。恐怖と痛みのあまり思考が迷走してるっばい。

——まあなにはともあれ、とりあえずはベストとってよい結果が出たわけ、か。

アリシアは間違いなく怒っているけれど、それでも自分が怒っているという事実に対してどこか幸せそうだし、プレシアも求めてやまない娘と対話している今、これまでにない柔らかさを雰囲気を感じる。これがアリシアの知っている、リニス先輩から教えてもらった作文に書いてあったような『お母さん』の片鱗なのだろう。

予想以上の(とというか想定外の)負担を強いられているとはいえ、魔力にも精神力にもまだまだ余裕がある。「以心伝心」と視覚、聴覚情報の共有は母娘の会話が終わるまで

続けることが可能だろう。

《アルフから失礼な念を感じた気がしたけれど……まあいいや。じゃあお母さん、きちんと反省して、もうわたしを生き返らせようとししないでね？》

「っ、それは——！」

今まで唯々諾々と説教を受けていたプレシアが、はじめてアリシアの意に反する姿勢をとった。

まあ当然だ。プレシアはアリシアを失ってからこの十数年、ただそれだけを目的に生きてきたといっても過言ではないのだから。

「チャンスをちょうだいアリシア！ 必ず、ぜったいにあなたを生き返らせて見せるから——！」

《っ、ダメだよ。わたしはもう死んじやってるんだもん。お母さんはもう過去ばかり見てないで、わたしの分までフェイトを愛してあげて、幸せにしてあげて》

「私にとつてアリシアは過去なんかじゃないわ！ フェイトとあなたは違うの！」

《またそんなこと言つて！ いい、フェイトは——》

「アリシアはアリシア、フェイトはフェイトよ！ どちらも大切な私の娘だわ。……アリシアに言われて気づいた。私はアリシアも、フェイトも、二人とも愛していた、愛している。どちらかの分をどちらかにまわすことなんて、出来ない。二人とも大切なの

!

《じゃあお母さんは——!》

アリシアの顔がくしゃりと歪んだ。言つてほしくない、聞きたくない。でも聞かないと。ぼくはそのためにここににいるんだから。

《わたしを生き返らせる方法を、見つけることが出来たの?》

「そ、それは……」

プレシアは唇を噛みしめた。食い破られて、血が流れ出す。それが答えだ。

《だからもう、いいんだよ……おかあさんはさ、この二十年、がんばったじゃない……大天才のおかあさんに無理なら、きつと……他の誰にも無理なんだよ……もう、いいでしょう……お願いだから……》

もう死者わたしには、とらわれないで。

アリシアは泣いていた。

どうしてこうなつちやうんだらう。さつきまで、あんなに幸せそうな親子だったのに。

《たしかに短い人生だったよ……後悔がないなんて言わない……でもね、わたしは幸せだった……おかあさんの娘だったおかげで、幸せな人生がおくれたんだよ》

だからもういいの。フェイトと、リニスト、アルフト、お母さんは幸せになつて。わ

たしはもう十分、お母さんからもらったから。アリシアが言葉を紡ぐたびにプレシアの拳がますますきつく握りしめられ、血が滴る。震える肩は今にも砕けそうだった。

絶望？ 無力感？ 気持ちがわかるだなんて、口が裂けても言えそうにない。

《今度は、おかあさんの番なんだよ》

涙でぼろぼろになった笑顔。こんなにも綺麗で悲しい笑顔、生きているうちに見ることになるとは思わなかった（一度死んではいるけど）。

「でも、アリシア、あなたは、まだ……」

見るに堪えない。

じゃあどうする？ ハッピーエンドを探すのか。

——じつは手掛かりならある。アリシアが生き返る手掛かりなら、ぼくの中に。

でも、それは正しいのか？ 死者を生き返らせるなんて、許されるのか？

いや、そうじゃないな。正しいとか正しくないとか、そんなもの言い訳、ごまかしだ。ぼくはただ、これを知られるのが怖いだけで——。

「……なんですつて？」

《……アルフ、それ、ほんとう？》

気がつけば、空気が止まっていた。

あれ、もしかして………漏れてた？

どちらが獣かわからない獯猛な勢いでプレシアの腕がぼくの襟首を捕え、息を継ぐ間もなくがくがくと揺さぶられる。

「話しなさいっ！ いま、すぐ！ でまかせだつたら承知しないわよ！ 瀬戸際なのっ！！ アリシアが、帰って、くるかの！」

あー、疲労で制御が甘くなつてたのかなーなんて現実逃避している場合ではないことはさすがのぼくでもよくわかるよ。

《お、お母さんおちついて。なんか泡吹いてるよ。顔色紫だしチョーク入っちゃつてるかも》

アリシアの口添えでなんとか九死に一生を得た。しかしぼくのピンチはまだ終わらない。プレシアは殺気立った目でぼくをにらんでいるし、アリシアも真剣な目でぼくを逃がさないように見つめているのだから。

いや、そう感じるだけ、か。すがるような光をその目に感じるのも、ぼくの心がなせる業か。

理不尽な運命に一生を狂わされたアリシアとプレシア。神も仏も、奇跡も救いもない人生を歩んできた彼女たちを、『かみさまの奇跡』で救うことが出来るんだつたら――。

覚悟、決めるか。

「……話します。でも条件が、いや、お願いがあります」

そう、切り出した。

「……何かしら」

「今までの話を、フェイトと、リニス先輩に。これから行うことが成功すれば、どうせ二人にも秘密ではいられませんし、それに——」

これはぼくの根源にかかわる話でもある。それをさらして、そこから前に進むのだったら、ぼくの大切な人たち、みんなと歩いて行きたかった。

ぼくは自分が転生者であるということを、これから打ち明ける。

◆ ザ・暴露大会！

一番、プレシア。『実はフェイトはアリシアを生き返らせようとして創ったクローンの失敗作だったのよwwww。でも今では可愛い私の娘だから許してね☆』

二番、アルフ。『実はぼく、前世の記憶があるんです。神様から転生させられちゃって。多分これ、使い魔作成時のプロセス中の人工魂に前世のぼくの魂を融合させているよねwwww。これを応用すればアリシア復活につながると思うんですがどうでしょう☆』

……いや、さすがにここまで変なテンションだったわけじゃないけどさ。

フェイトが自分の正体を受け入れるのも、ぼくの正体が受け入れられるのも、予想以

上にあっさり、あまりにもあっけなく終わってしまった。

ぼくの覚悟はいつた何だったのか。ぼくがネガティブ過ぎただけなのか？

いちおうフェイトはプレシアの口から聞かされた真実にシヨックを受けているようだった。が、何か納得した。すっきりしたとも言っていた。よくよく話を聞いてみるに、フェイト本人はプレシアの態度に疑問を抱いていなかったが、ぼくがプレシアに対して違和感を覚えていることは敏感に察知しており、そこから自分の正体に漠然とした予感を抱いていたとか。ほんまかいな。

『ようやく私の居場所が定まった気がする。ここからようやく私は生まれるんだ。聞かされた内容はシヨックだったけど、そのおかげで私はアルフに会えたし、アリシアお姉ちゃんだっているんだもん。ね?』とはフェイトさんの談。フェイトさんマジポジティブ。女の子って強えーと思つた瞬間でした。面と向かつて母たる人に『愛している』と告げられたのも何気に効いている気がする。今までそんな機会なかったからね。ぼくの正体暴露に関して言えばそれよりもっと軽かった。

『うーん、前世があつてもなくても、アルフはアルフだよ。え、ダメなの? アルフは私のこと嫌い? 違う? よかつたー』

『ああ、そんな理由があつたんですね。納得しました。え、何も察していないとでも? 一度も食べたことがないはずのものを食べたいと呟いたり、あやとりや折り紙といっ

た遊びをフェイトに教えたり、すぐろくやトランプを自作したこともありましたね。何かあるんだらうとは思っていましたよ』

以上、ぼくに縁の深かった二名からのコメント要約。

アリシアはそんなものかみたいない態度で納得するし（何しろ自分が幽霊という非常識な存在の代表）、プレシアは話の途中から神や靈魂の存在を前提に『プロジェクトF・A・T・E』の再構築を検討し始めるし、ぼくの存在を受け入れてもらったって言うのになぜか完全アウエーな気がしてならなかったよ。

その日を境に様々なことが変わった。

大きな変化のひとつとしてはリニス先輩の廃棄処分がなくなった。もともとフェイトが一人前になるまでの教育係として使い魔の契約を結んでいたリニス先輩だけれど、生前リニス先輩を山猫状態で知っていたアリシアがリニス先輩契約終了に断固反対したのだ。テストロッサ家勢力図単独トップに躍り出たアリシアの要求に逆らえる存在などこの家には皆無。結果、プレシアがリニス先輩の契約を更新することが決定された。アルバイト契約更新並みのあっけなさだった。

『消えたかったわけじゃないですけど、なんだか気が抜けますねー』とリニス先輩は苦笑していたつけ。まあねえ、後を任せる気構えでフェイトの専用インテリジェンスデバイス『バルディッシュ』作成に心血を注いできたわけだし、それがいきなりずつといら

れることになつたらひどい肩すかしをくらつた気になるのも無理はない。

ぼくとフェイトにとつては喜ばしい限りだけどね。

フェイトの魔導師としての訓練は未だに継続中。プレシア、アリシアといった家族と過ごす時間ができ、鍛錬に費やされる時間は減つたものの、今までプレシアの意向のままに修業をしていたフェイトに『はやく一人前の魔導師になつて母さんとアリシアお姉ちゃんを安心させてあげるんだ』というモチベーションが出来たためか、成長速度はむしろ上がっている気がする今日この頃である。……ほんまええ子や。

一段落つてから見直してみると、あの鍛錬の日々は狂気に駆られたプレシアなりの愛情だったのかもしれない。プレシアはきつと、死にたがつていた。十何年と研究を重ねようと見えてこない光。しかし途中でやめるには彼女は娘を愛しすぎていたし、すべてを注ぎ込み過ぎていた。引き返せないとこまでいつてしまっていた。

だから、隣にいることはできないけれど、自分が亡きあと、せめて一人で立つていられるだけの力を。過去にとらわれ終わりゆく自分から羽ばたく翼を。フェイトに未来を、与えようとしていたのではないか。

なんてのは、深読みのし過ぎかな。

ぼくはフェイトの使い魔としてのレベルアップに、アリシアの通訳、プレシアの研究材料——もとい研究協力で忙しい日々を送っている。貧血ならぬ貧魔力で目まいを起

こしそうだけど、充実した毎日だ。……少し充実しすぎかな？

プレシアはアリシアとリニス先輩にいさめられて以前のような無茶なタイムスケジュールで研究を行ってはいない。アリシアの副官として着々とテストロッサ家ナンバーツールの地位を築きつつあるリニス先輩である。

それはともかくとして、そのうえでもプレシアの研究の進み具合はすさまじいの一言に尽きる。『プロジェクトF・A・T・E』は『使い魔を超える人造生命の作成と死者蘇生の研究』だから使い魔作成もまったくのお門違いってわけじゃあないんだろうけどさ、あの人は本当に天才なんだと理解させられた。もしあのままアリシアの存在に気づかないままだったら、将来的に十中八九敵対することになってたんだろうな、くわばらくわばら。

ちなみになんでぼくがプレシアの研究の進行度を理解しているかというと、色々やらされているからだ。わけわからん電極を全身につなげられて半日間過ごしたり、胃袋がいっぱいになりそうな数の錠剤、粉薬、カプセルをがぶ飲みさせられたり。耳から脳みそに電極差し込まれそうになったときはさすがに丁重にお断りさせてもらった。

アリシアの通訳が出来るのがぼくだけじゃなかったら、とつくの昔に生きたまま解剖されてるかもしれん。半分冗談だけど（つまり半分は本気）そう感じる。

研究の基本方針としては本人の身体を魔力で再構成しつつ、人工魂をベースにオリジ

ナル魂と融合させて定着させるといふものらしい。本人の記憶、性格を完全な形で残すために、身体能力や寿命を使い魔でいうところの『契約者』と独立させるために、人間と同様に成長し、年をとり、結婚して子供が産めるようになるためにと、アリシア一人のためだけに専用の術式をほとんど一から構築している。使い魔の契約魔法なんて名残しか残っていない。

魔法をそれなりにかじった者からすると、それがどれだけ困難な作業なのか理解できてしまう。信じられるか、あれであの人通院してんだぜ？ 幸い、普通に治療すれば治る病気だったらしいが、あのまま放置していれば危なかった、と聞いた。全快すればどれほどのものになるのか想像もつかない。

本人いわく、今までにない手ごたえを感じているので疲労も苦痛も感じないそうだけど……ふう、マッドサイエンティストめ。希望に向かって一直線だね。でも気をつけて。金の卵を産む鶏を殺してしまつたら、また赤貧生活に逆戻りだよ。焦らず、毎日、一つずつ掴みとつていこうね、と身の危険を感じる鶏チキンとしては言ってみる。

頼みましたよ、アリシア、リニス先輩。ぼくの明日はあなた方の抑止力にかかっています。

そんなある日のこと。

今日は久しぶりにフェイトとふたり、ゆっくり過ごせる時間が取れたのでフェイトの

膝枕でぐたーとくつろいでいた。羞恥心？ ああ、昔はあったね、そんなの。

「アルフ、大丈夫……？」

「うーん、ふえいとー、ぼくはもうだめだー。ベッドの下にこっそり隠しておいた板チョコのことは頼んだ」

「なんでそんなところに……腐るよ？」

「大丈夫。チョコレートは非常食にもなるくらい栄養満点で長持ちだから」

「かびるよ？」

「それはちよつと心配かも……」

おひさまはポカポカ。開け放たれた窓から入ってくる風が心地よい。

魔力の大量消費で全身にしびれるような疲労感があるが、それすらも今は眠りを誘う気持ちいいものの一つでしかない。

最近、こんな時間ってなかったなー。アリシアの通訳にプレシアのモルモット——じゃなくて研究の手伝いで毎日こまめに時間をとられて。さすがに身体が持たないの。一日の通訳時間を決めさせてもらった。仲睦まじい親子の会話を制限するのは心苦しいが、実際問題魔力が枯渇するのだから仕方がない。プレシアもちゃんと納得してくれたし。

一日の消費魔力量を厳密に計算され、健康に害を及ぼさない限界値ぎりぎりまで時間を

設定されたのには顔が引きつったが、まあそのあたりはご愛敬だろう。

「……」〔苦勞様〕

そう言つてフェイトが頭を撫でてくれるから、ぼくはまだまだ頑張れます。

耳は。パタパタ、尻尾ふりふり。使い魔つて言葉に出さなくても感情表現が出来るのはお得だよな。

アリシアと出会つてから食事はテスタロッサ家の全員が一堂に集まつてするようになったし、訓練でも連携戦とかがあつたりするから、フェイトと過ごしている時間が短いつてわけじゃないんだけど、こんな何にもないフリーな時間は本当になかつたのだ。

やさしく頭を撫でてくれる小さな手のぬくもりを感じながら、意識が溶けてゆく。

ぴくん、と規則正しく揺れていたぼくの耳が何かを捕え震えた。

「……アリシア？」

「え？」

——【以心伝心】発動。

《あ、アルフ。ごめんね。なんかお母さんが呼んでて……》

通訳で長時間アリシアの隣にいたせいとか、アリシアが近くにいたり、こちらに話しかけようとしたりしていると気配でそれを察知できるようになった。靈感かな、これ？

意志疎通は未だに「以心伝心」を使わないと出来ないだけだね。フェイトが隣にいるので視覚と聴覚の共有も並列して行う。

「お姉ちゃん？ 今日のお話タイムは全部使い切ったはずだけど……」

ぼくが口を開くよりも先にフェイトが口をはさんだ。ぼくの自惚れでなければいささか不満そうだ。かわいい。フェイトがこのようにアリシアに文句らしきものをいうことは滅多にないので貴重な光景といえる。

しかし、アリシアは申し訳なさそうな表情をしながらも引くことはなかった。

《ほんとうにごめん、フェイト。でも、急ぎの用事みたいで……》

「……わかった」

ぼくが口を開く前にいくことが確定してしまったが、それは別にかまわない。いつものことだし。……べ、別に悲しくなんてないんだからね！ ……やめよう、不毛だ。フェイトはやさしくて賢い子なのだ。自分の感情を別にして姉の状態を慮ったり、ルールを違反してまでぼくを呼ぶということは本当に緊急事態に違いないと悟ることが出来るくらい。

ただ、ぼくが身体を起こした時、使い魔の感覚をもつても聞こえるか聞こえないかというほどの小声で「私の使い魔なのに、お姉ちゃんの、ばか……」とフェイトがつぶやいたのをぼくの耳は聞き逃さなかった。

……なにこのかわいいいきもの？ 脊髄反射で抱き潰しかけたばくは悪くない。鋼の精神力で自制したけど。

あと十年は余裕で戦えます。比喩でもなんでもなくてリンカーコアが活性化し、魔力が急激に回復してゆくのを感じる。すごいね、使い魔。

フェイトと別れ、アリシアの後を追って廊下に出る。眠気はすでに飛んでいた。フェイト分を大量に補給したアルフさんのコンディションはバッチリだ。

「で、ほんとうの用事は何？」

《……気づいていたの？》

「フェイトは失念しているみたいだけれど、お話タイムを使いきった後のアリシアって外を散歩していることが多いだろう。ボスも多分それ前提で動くはずだから、何か用事があるならリニス先輩が呼びに来るはずだ」

なんでも野生動物の中にはアリシアの言葉を理解したり、触れたり出来ないものの、認識することのできる個体は少数ながら存在するそうで、昔からアリシアはそういったに接触して無聊を慰めていたらしい。……そんな話、あいつらからは聞いたことがなかったけどね。

そこにいることが確実ならともかく、そうでもないのにアリシアに伝言を頼むなんてあの几帳面な性格をしたマッドサイエンティストではありえない。

《ごめんね。変なやつがいたの。怖くて、無視しちゃいけない気がして。お母さんやり
ニスには心配かけたくないし……》

「ふうん、案内してもらえる？」

《うん、こつち》

アリシアはほっとした表情を浮かべると先導を開始した。

正直、この年齢の子供って親に心配かけるのが仕事のような気がするし、防犯的なもの
は報告しない方が迷惑だと思っけど……。あ、アリシアは自身はレディだっけ？

廊下の窓から飛び出し、ふわふわ空を飛ぶアリシアの後ろを追いかけながらリニス先
輩に向けて「念話」を立ち上げる。

《もしもし、こちらアルフ。リニス先輩、聞こえますか？》

《あらアルフ、どうしたの？》

《アリシアが不審者を発見したようなので迎撃してきます》

《……領内への侵入者は傀儡兵が撃退するはずだけど。大型を突破したのならかなりの
使い手ですね。応援はいりますか？》

《大丈夫です。ただ、相手が複数だった時の備えをお願いします》

《わかりました。無茶はしないでくださいね》

《了解》

ふう、相変わらずリニス先輩は頼りになる。会話をするだけで安心できる頼もしさだ。最近日向ぼつこしながらお茶をすするご隠居のような姿も見られ始めたけど、まだまだ現役だね！

相手の確認もしていないのにぼくが大丈夫だと言い切ったのには理由がある。近くにいることが多いので気づいたのだが、アリシアは妙に勘が鋭いのだ。

それが生来のものなのか幽霊ゆえの靈感なのかはわからないが、それはもう、何度じゃんけんをしても勝てない。その彼女がぼくだけを呼びに来たのだ。ぼくだけで解決できる程度の脅威なのだろう。

もしくは、ぼくだけで迎撃にあたることが望ましい状況であるか、だ。

ぼくには敵にかみついたための牙がある。ぼくには敵を切り裂くための爪がある。

だからぼくが求めたものは追加の武器ではなく、守るための盾。

「ペルタ——起動」

インテリジェンスデバイスのように特に返答は無く、銀の首輪が光ったかと思うと次の瞬間には左前腕部に三日月形の小型の盾が展開されていた。速度を重視してこのような仕様にしてもらったのだ。それに、道具がしゃべるってなんか気持ち悪いし。前世で軽い人間嫌いだった弊害かな？

リニス先輩からもらったぼく専用ストレージデバイス『ペルタ』。戦闘時に時間がな

くて起動できず、なんて洒落にならない。実戦は初めてなのだから、できる準備は自前
 にできる限りしておかなくては。チャイルドこいぬフォームからアダルトおとなフォームに姿を切り替え
 る。取られる魔力量の増大からフェイトには気づかれるかもしれないが、そこは後でこ
 まかすか説明するかしよう。

バリアジャケットも身にまとい、戦闘準備は完了。と、視界の前方、アリシアの身体
 を透かして森の中で何かが光ったのが見えた。おそらくは戦闘している魔導師の魔力
 光。

「あれ、か」

《もうこんなところまで近づいてきている》

不安そうに自分の体を抱くアリシアにほほ笑みかけると、木々の隙間に目を凝らす。
 距離は五百メートル強といったところか。このくらいなら使い魔の視力があれば特に
 魔法で強化せずともはつきり見える。もつとも、使い魔はそもそもが魔法生物だけど。
 ……………一目見て納得した。あれはやばい。アリシアの嫌な予感正しい。

年齢はたぶんフェイトと同じくらい。バリアジャケットは派手派手しい悪趣味なも
 のに感じたが、その下の肉体は細身ながらも鋼を束ねたかのようなしなやかさと力強さ
 をうかがわせた。鍛錬で作り上げたにしては不自然な筋肉のつき方に思えるけど、どう
 やって鍛えたんだ？

顔立ちは整っている。長い銀髪は森の木陰に隠れながらも光を反射して輝いているし、金銀のオッドアイは一度見たら忘れられない妖艶さを備えていた。美少年といってもいい。

もつとも、あの眼つきは好きになれそうにないが。まるで銀幕越しに世界を見ているようで気持ち悪い。現に今も戦闘中だと言うのに、自分に似た主人公が画面の中で活躍しているのを安全な場所から眺めているかのような興奮と好奇しか感じられない。大胆不敵とかそんなんじゃないと思う。

そして大型の傀儡兵を砲撃魔法で消し飛ばす戦闘力。ここから見てわかる馬鹿魔力に物をいわせた力技だ。排除すべき強敵と見て動いた方がよさそうだね。

幸運なことここちらが風下のため、音や匂いで相手に気づかれる危険性は低い。逆に、相手の声がぼくの耳に聞こえてきた。

「……………これで、ラストオー！ ……ふう、傀儡兵はあらかた片付いたか。プレシアへの戦力アップはこれで十分だな。原作開始まであと一年、魔導師ランクSSSの魔導師の助力は喉から手が出るほど欲しいはず。この時点からリニスを手放して傷心のフェイトに取り入って……………くくく。おっしや、『時の庭園』も見えてきたしもうひと頑張りだ俺！」

使い魔の聴覚だから聞こえた。アリシアには聞こえていないはず。

聞き逃せない、聞き逃してはいけない情報が短いセリフの中にいくつもあった。

どこまでこちらの情報を把握している？ 少なくとも迷い込んだとかそういう輩でないことははっきりした。

『原作』ってなんだ？

魔導師ランクSSS、脅威だな。排除を前提にするなら奇襲で片付けるところだけけど、情報が欲しい。

長く考えているひまはない。あれはもう動きだした。飛行速度を考えるとあつという間に見失ってしまう。言動から判断するに単独犯っぽいけれど、リニス先輩のところに行くまでにはけりをつけたい。

ぼくはアリシアに話しかけた。

「アリシア、戦闘になると思う。血みどろのところは見せたくないから先に帰っておいてくれないかな？」

《……ううん、ここで待ってる》

「そうか。じゃあせめて近寄らないように。ぼくみたいな能力を相手が持つていないとは限らないんだから。それからしばらくは戦闘に集中するから話しかけられても応えられないからね」

本当はもつとじっくり説得したかったけれど、時間がない。ぼくは【以心伝心】の使

用をやめ、しばらく使っていないかった最後の一つの転生特典を起動させると宙を蹴って飛び出した。

相手に接触するまでの短い時間にふと考える。何も聞いていないのにぺらぺら目的をしゃべってくれるあれ、すごく三下臭がするよな。長年の計画を声に出して間違いがないか見直しているみたいだったけれど……。

威嚇射撃で一発、相手の進行方向に「フォトンランサー」を撃ち込む。動きが止まったそのすきに前に割り込み、胸を張って停止。

「ここはテストタロツサ家の領地だ。これ以上の侵入は法に基づいて排除する。これは最終通告だ。ちなみに、傀儡兵の弁償はどうあってももらうからそのつもりで」

口上はまあまああの出来。死者蘇生の研究をしている現在、時空管理局のお世話になるのは避けたいところだ。相手がどれだけこっちの情報を把握しているかによつては、帰すことが出来なくなるかもしれない。

物騒だな、なんて他人事のように冷静に考える。

「うお、すっげ、リアルアルフだ！ そっかー、撃退にはアルフがきたか。フェイトに俺 T U E E E はまた次の機会な。まあアルフはテストタロツサ家カースト制度最下層だもんな。それにしてもいい身体してんな」

「……………ぼくのことを知っているのか？」

「なん……だと。まさかのボクっ子おお!! ハイキタコレ! お姉さんケモミミほんのり従者属性でボクとか何があったし! もう他の転生者がいるのか? くっそ、ふざけんなよ。転生オリ主は俺だろ」

なんだコイツ、話を通じない。

予想していなかったわけじゃないけど予想以上だ。気持ち悪い。

視線が重ねて気持ち悪い。思い返してみれば、生まれ変わってからこの体に対しての異性に会うのはこれが最初かもしれないなかった。初めてがこれじゃあな……男性不審になりそうだ。フェイトを連れてこなくてよかった。グッジョブアリシア。

カースト底辺はほっとけや。

「ああん、っーかそれ、デバイスか? なんでアルフがデバイス装備してんだ? っーかなんで使い魔がデバイス装備できんだ?」

いつのまにか銀髪変態オツドアイの興味は別に移っていたようだ。危ない危ない、どう考えても危険人物なんだから集中しないと。

答えずにいると、変態はいぶかしげに眼を細めた。

「もしかしてお前、憑依転生者か?」

その言葉が出てくるといふことは――。

やはり、こいつも転生者だったか。こいつもぼくと同じ境遇なのか、それともあの女

神が出鱈目ぬかしていたのか。

後者の可能性が高いな。でないと他にも転生者がいることを前提に動いている節のあるこいつの言動が説明つかない。

少なくとも、こいつはぼくが知らないことを知っている。その前提で先ほどの言葉にどうこたえるか吟味する。思考は一瞬。結論、情報が少なすぎる。ここはアクションを起こして様子を見てみよう。

「そうだ」

「かあー、マジかよー！ よりにもよって原作キャラに憑依とかありえねー。アルフ結構好きだったんだけどなチクシヨウ！ フェイトやはやてに憑依とかしててみる、泣くぞ、ぜったい！」

『原作』っていったいなんのことなんだ？」

こちらが情報を持たないことを相手に告げる危険な一手。

だが、この手のタイプは自分が上にいると判断させて情報を与えさせるといふ形にした方が有効だろうと判断した。何気ない会話で相手から望む情報を引き出すにはこちらの交渉の経験値が不足し過ぎている。前世は人間嫌い、今は関係者以外接触皆無といつてよい生活環境だからね。

「は？ ……ああ、お前、原作知識がないのか。ほーん。くく、いいぜ、教えてやろう、

この世界はな、『魔法少女リリカルなのは』というアニメをモデルにした架空世界なんだよ」

変態はぼかんとマヌケ面を一瞬浮かべたが、すぐに嘲笑に切り替えてこちらの望む情報を漏らしてくれた。しかもぼくからの質問にも丁寧な答えてくれる親切さだ。

……ちよろ過ぎる。交渉ってこんなのでいいのか？ もちろん、相手にも何か思惑はあるのだろうけど。まさか何も考えてないってことは無いはず、無いよね？

気持ち良さそうに自分の持っている知識をさらけ出す変態の姿を見ているとこちらの方が不安になりそう。ならないけど。話が出来る友達がいないのかもしれない。

閑話休題。

話された内容は『プロジェクトF』を聞いて以来の、あるいはそれ以上のシヨックをぼくに与えた。

『魔法少女リリカルなのは』。アニメ、小説、漫画、映画などで彼の世界で一世を風靡していた作品。この世界はそれらを元に神の手により創造された架空世界。

さらに、ぼくらは神が暇つぶしのために用意した人形だと、そう言った。与える能力は三つというルールを設定し、誰の用意した人形が一番うまく踊れるか、ただそれを競うためだけに架空世界に放り込まれた魂だと。これはぼくのとき同様、話半分に聞いておいた方がよさそう。判断基準がないし。ただ、転生者が複数存在する可能性と、そ

れらが全員三つのむちゃくちゃな能力を所持している可能性は心にとどめておいた方がいいだろう。

彼がいつていた『憑依』の意味を理解する。やはりこの世界にいるべき『アルフ』の存在を、ぼくは奪つてしまつていたのだ。

……『プロジェクトF』発覚以前のぼくなら罪悪感と自己嫌悪にとらわれていたかもしれないな。

ここがどんな世界だろうが、神にどんな思惑があるのか知つたことか。ぼくはここに生まれてきたし、フエイトはとても可愛いですし、愛していますし、愛されていますし、すべて世は事もなし。

悪いな、『アルフ』。このポジション、ひとり用なんだ。要するに開き直つていますが何か？

さて、知りたい情報はこれ以上引き出せそうにないし、そろそろかな。

ぼくにとつてここは第二の人生(犬だが)を歩む現実世界だが、目の前のコイツにとつては自分の欲望を満たす仮想空間だ。話をしていてそれがひしひしと感じられた。こいつは此処を生きていない。ならば此処の住人たろうとするぼくと道が交わることは無いだろう。

こいつも同じことを考えているのか、嘲笑を浮かべたまま今は口を閉ざしている。

「おい、知りたいことは知れたかよ?」

「ああ。ご親切にどうもありがとう。大変参考になった。感謝している」

どこまでもしらじらしいやり取り。空気は張り詰めているのに、ぼくもこいつも表情すら変えない。

「なあ、一つ俺からも質問だ。俺がこれだけお前にぺらぺらと情報を与えてやった理由、わかるか?」

なんか前世でやったゲームに似たやり取りがあつたな。確か正解は……。

『勝利を確信しているから』、か?」

「正解だこのヤロウ。ご褒美に俺の糧にしてやろう!」

「ぼくは女性だけど、ね!」

「ほざけ憑依がっ!」

そうであるがままに破局。素早く距離をとろうとする相手と、詰めようとするぼく。

先手をとって片付けようと思ったが、発動までの刹那の間にくんとこつちの精神にノイズが走った。気持ち悪い違和感を全身に感じる。魔力枯渇に似ているが、ぼくの中の魔力の総量に変化はない。別の、生まれてこのかた常に共にあつた力が消え去った感触。

「最後に教えてやろう! 俺の転生特典は他者の転生特典を打ち消す〔神喰らいの魔

眼〕、「理想の肉体」〕、「魔導師ランクSSS相当の天才的資質」の三つだ。シンプリーズベスト！ 事前に転生者の存在を知らされていた俺と原作知識皆無なお前じゃ、スタート地点が違うんだよお!!」

「つち、これは……キツイ。」

情報の正しい活用のさせ方、といったところか。相手の特殊能力を打ち消し、自分はこの世界の法則にしたがった最高ランクのスペックでごり押しする。悪くない戦略だ。思ったより馬鹿ではないらしい。

ただ、情報というのは時によって視野狭窄も生み出す。

例えば、他の転生者の存在を意識するあまり、『転生者同士の戦闘は転生特典で得た能力のぶつけ合いになる』と思いついて入っているとかが。

他の転生者の存在も知らず、自分に自信のない、心が複雑骨折だった人間が、ただ死亡直後のダメージを軽減し、来世では同じ過ちを繰り返さず少し便利に生きることだけを考えて能力をチョイスしたただなこと、目の前のこいつは考えもしないに違いない。

【餓狼口】——発動！

「があ!？」

異音を口から漏らし、地面に真つ逆さまに落ちてゆく転生者を、ぼくは醒めた目で見

ていた。「神喰らいの魔眼」とやらはアクティブタイプだったようで、相手の意識が混濁したことからの影響が消えていた。自分の中に再び起動した、滅多に使わない転生特典に意識を向ける。

▽

能力名：【明鏡止水】

タイプ：パッシブ

分類：心身強化

効果：常に澄み切った思考を獲得する。

△

生まれてから今までで色々試してみた結果、得られた転生特典に関する考察。

一つ、パッシブタイプの能力は常に発動し続ける。一方、アクティブタイプの能力は一定時間しか効果がなく、しかも発動には何らかのコストが必要。

一つ、パッシブ、アクティブともに効果時間中であろうと使用者の意志で効果を無効化できる。ただし、『タレント』とついているパッシブタイプの能力は使用者の体質や生まれ持った素質、運命等に深く関与しており、自分の意志で消すことはできない。

一つ、アクティブタイプの能力は発動に条件がある。また、継続して効果を発揮するためにはコストの消費と使用者の意志が必要不可欠。

とりあえずはこの程度。分類とかは能力の絶対数が少なすぎてわからない。

この【明鏡止水】は今ではもうだいぶ記憶の薄れた前世で、交通事故に遭わないはずだった子供を助けようとして死んでしまった過去の失敗を繰り返さないために望んだものだ。

『常に冷静でいられる判断力がほしい』と。

効果発動中は常に冷静でいられ、また強制的に心が凧の状態にされるため雑念にとらわれることもない。コスト消費を必要としないパッシブタイプの能力だということを考慮すると破格の効果だが、日常生活でつかうことはあまりなかった。

便利は便利んだけど、喜びも悲しみも認識はできるがとらわれることがない。表情も仏像めいた見通せないものになってフェイトやりニス先輩に心配される。感動を「理解」しかできない人生（犬だけ）なんて味気なさすぎる。そういうわけで戦闘訓練や、どうしても勉強が嫌になって手がつかなくなったときにしか使用していない。

おかげでわんこながらも学力は天才フェイトさんとほぼ互角です。

そういえば、とふと思う。先ほどの【神喰らいの魔眼】の効果が口上通りなら、フェイトとぼくをつなぐ【比翼連理】も無効化されていたはずだ。もちろん今は問題なく起動しているが、あの瞬間、フェイトとぼくの関係性はどうなっていたのだろうか。

恐怖を認識したが、【明鏡止水】の効果でとらわれることは無かった。

墜落した転生者に歩み寄ってみると、驚いたことに相手はまだ生きていた。顔の穴と
いう穴からどろりとした血を垂れ流してはいたが。

見切りが甘かったか。それともはじめての人殺しに気負いで手元が狂ったのか。た
ぶん両方だな、と冷静に考える。

記憶をもとに誤差を修正。今度は精神も風いである。次ははずさない。

「が……てめ……」

「まだ意識があるのか、頑丈だな。【理想の肉体】の効果か？」

目の前の半死半生の転生者のもう一つの視野狭窄。それは原作の知識を知るあまり、
この時点のぼくがオリジナルの魔法を放ってくる可能性を考慮に入れていなかったこ
と。

小説や漫画を読んでときどきあること。この能力、こんなふうに使った方が強い
んじゃないかというひらめき。ぼくは天才というわけでもなかったし、この世界に対す
る事前知識もなかったから、分類されているのと別の目的で既存の魔法を使うことを思
いついたし、抵抗もなかった。

天才である彼はきつと作中の魔法に精通していた。既存の魔法を苦も無く扱い、その
圧倒的な力で敵を打倒してきた彼にとって、工夫する必要なんてなかった。例えば『ア
ルフ』が使用していた魔法でぼくが戦えば、彼はまず負けることは無かっただろう。

フェイトでも厳しかったかもしれない。

【餓狼口】——その正体は、リニス先輩が考案してくれた移動用シールド魔法【タンバリン】を攻撃に転用した技である。

【タンバリン】はその展開時に大きさや性質をある程度変化させることが出来る。大きさは全身を覆うような巨大な円盤から、その名の通りぎりぎり足全体を乗せることが出来るタンバリンサイズまで。性質も【ラウンドシールド】同様衝撃を受け止める使用から【プロテクション】のように反発力を持たせるなどと自由自在——とまではいかないが、自由度がかなり広い。

専用ストレージデバイス『ペルタ』のメモリの大半（およそ八割）をこの魔法とそのバリエーションにつき込んでいるがゆえのこのスペックである。フェイトの最高速度についていききたいのならこのくらいの馬鹿はしないと無理なのだ。

【餓狼口】は反発力を最大に設定した【タンバリン】二枚を、遠隔発生でおよそ数ミリの隙間を意図的に空けて対象の頭部を挟み込む形で展開し、接触、高速で交互にシールドに打ちつけさせることにより、相手の脳に深刻なダメージを与える技である。

シールド系であるがゆえに展開が早く、攻撃魔法に警戒している相手の隙を突くことが出来る。また、バリアジャケットは打撃や斬撃に対しては強いが、衝撃や慣性を殺しきれない欠点がある。この技が決まればダメージがほとんどそのまま通ってしまうの

だ。

この技の欠点をあげるなら成立にはミリ単位の空間把握能力が必要不可欠だということ、対人戦以外は効果が薄いこと、そして「バリアバースト」などとは違い魔法そのものは純粋なシールド系であるため、ミッド式魔法の最大の特徴たる非殺傷設定ができないってとこかな。

軽くでも決まれば相手は脳をシェイクされまともな戦闘は継続できなくなるし、まともにも決まれば相手の頭部はポップコーンよろしく弾けることになる。

こんなふうに。

周囲に飛び散った赤、灰色、黄色、ピンク、白を見ながら、ぼくは相手の名前も知らなかったことに気づいた。気づいただけで心は凧いである。本来頭脳に供給されるはずだった鮮血が噴水みたいに飛沫しぶきを上げていて、吐き気も起きない。ある程度距離をとったので返り血はおろか、臭いがつくこともないだろう。

こんなもんか。それが初めて殺人を犯した、ぼくの感想。

自分が人外であるということを今までとは違うところで強く認識した。



《——識別名■■■■が識別名■■■■を撃破しました。法則ルールに基づき、識別名■■■■

■には識別名■■■■の転生特典の一部が譲渡されます——》

《——法則ルールに基づき、ランダムに転生特典の一部が譲渡されました。識別名■■■は能力の確認を行ってください——》

《——なお、撃破された識別名■■■■■は世界パンタレイの矯正力タ・レイの影響により、消滅します——

何の前触れもなかった。どこでもないとところで “声” を知覚したかと思えば、辺り一面に飛び散っていた転生者が一つ残さず白い炎に包まれ、一瞬で灰も残さず焼失した。 「があああアアアっ!？」

さらに転生時に感じた違和感が全身を蝕み、新たな能力の情報情報が脳裏に表示された。

▽ 能力名：【神喰らいの魔眼】

タイプ：アクティブ／フラグメント（1／3）

分類：法則支配

効果：他者の転生特典を打ち消す。

△

違和感は現れたときと同様、一瞬で消えたが汚辱感汚辱感は消えない。蹂躪蹂躪された。気がつけば膝膝について地面に崩れていた。まるで何か何かにひれ伏したみたいみたいに。

視界がぼやける。泣いているのは身体の反射か、悔しさか。神の意志なんて関係なん

だなんて啖呵を切っておきながらこれだ。わけのわからないふざけたゲームに参加させられていることはこれではつきりした。

《アルフー!》

暗い、真つ暗な感情に沈み込みそうだったぼくを、誰かが引き戻す。

「あり……しあ……う？」

いつからそこにいたんだろう。どこから見ていたんだろう。ぼくの肩を必死に揺さぶろうとして果たせない、幼い泣き顔がそこにあつた。

今気がついたんだが能力の使用がめちやくちやだ。【以心伝心】は意図せずスイッチが入っているし【明鏡止水】はいつのまにか切れている。さっきの蹂躪の影響か。

《アルフ、アルフ、いやあ、死なないで、消えないで!》

「あ、アリシア……とりあえず少し落ち着いて」

ぼくだって冷静ではいられないのだが、ここまで目の前で取り乱されると落ち着かざるを得ない。【明鏡止水】は問題なく発動した。能力の混乱は幸い、一時的なものだったらしい。

《ひく……ふぐつ……その顔、やめて……アルフが、アルフじゃないみたいで……怖い》

「ん、了解した」

ぼくが落ち着いてもアリシアが落ち着かなければ意味がない。泣きじやくりながら

懇願されたら【明鏡止水】をやめないわけにはいかなかった。幸い、一度発動させた恩恵で精神状態はぼりセットされている。それなりにまともにものを考えることができそうだ。

《ねえ、さつきの話……ほんとう？》

「わかんない……」

なんとか会話が可能なレベルまで落ち着いたアリシアが、おそろおそろといった様子で尋ねてくる。

『さつきの話』というのは、あの名前も知らない転生者が語っていた内容だろう。『原作知識』、『神々の暇つぶし』……あまり知られたくない内容が多い。それに、その時点から話が聞こえる距離にいたのなら人の頭部がはじけ飛ぶスプラッタな光景をアリシアに見せてしまった可能性が高く、いろんな意味でフォローが不可欠なようだ。

あの謎の“声”はアリシアには聞こえていなかったはず。変な確信がある。あれはきつと、ぼくら転生者にしか聞こえない。

《アルフも……死んじやったら、あんなふうに消えちゃうの？》

「……………わかんない」

でも、可能性は高い。一人の転生者が『いなくなつた』感覚がぼくの中にある。あの声の内容から推察するに、転生者は神の力かそこらへんによつてこの世界に紛れ込まさ

イレギュラー
れた異分子で、死ねばその力の加護が消え、世界から排除される、といったところか。具体的にどのようなようになっていのかは想像しか出来ないが、行方不明扱いなのか、存在ごと『なかったこと』にされているのか。

原作キャラに憑依しているぼくがどのような扱いなのかはわからないけれど、死ねばあのように灰の一粒も残さず白い炎によって焼失してしまう可能性は十分だ。

《ひぐつ……わたし、いやだよ、アルフが消えちゃうなんて……》

アリシアはまた泣きだした。質量をもたないその涙はぶつくりとした頬をつたい、顎から落ちるたびに光の粒子になって消えてゆく。

きれいだな、なんて場違いなことを考えた。

そんなこと言われましても、正直、困る。ぼくだって死にたくない。自殺願望を持っていない限り死にたくて死ぬ人間なんていないだろう。

死は逃れられないから受け入れるか、諦めるか。前に死んだ時は意識するまでもなかったから、なんとも言えないけれど。

《アルフはね……特別な。お母さんとは、違う。リニスとも、フェイトとも違う。……わたしね、ずっと信じて待っていたんだ。いつかきつと、お母さんがわたしを生き返らせてくれるって。だからね、寂しくても待てた。……だから狂わずに済んだ》

不思議に思ったことがないわけじゃない。

二十年近く孤独を味わったアリシアが、壊れずに済んだのは何故か。彼女を支えていたのはいったい何だったのか。

プレシアへの信頼だったのか。

それは幼い娘が母へと向ける絶対的な信頼。それは、奇跡のような、否、奇跡そのものの時間。

《ずっと、ずっと信じてた……でも、どれだけ経つてもお母さんはわたしを生き返らせる方法を見つけれなくて、どんどん壊れていって……ついにリニスが死んで使い魔になって……フェイトが生まれて……見ているだけしか出来なくて。どれだけ待つてもわたしは独りで……。だから、アルフに見つけてもらったときは本当にうれしかった》
氣づいていなかった。アリシアの喜びに。彼女の孤独に。救われた想いに。

のんきにわんこ生活をしていた。だからぼくはバカなんだ。この駄犬め。

ぼくの自嘲をよそに、アリシアは言葉を紡ぎ続ける。

《アルフとの言い合い、忘れてないよ……一生、忘れない、何があつても。……ありがとうアルフ、わたしを見つけてくれて。ありがとう、私と口論してくれて》

ふざけ合ってくれてありがとう。お母さんを助けてくれてありがとう。わたしを生き返らせる方法を見つけてくれてありがとう。研究に協力してくれてありがとう。通訳してくれてありがとう。フェイトを助けてくれてありがとう。

ありがとう。ありがとう。ありがとう……。

涙をこぼしながら小さな両手いっぱい『ありがとう』をくれるアリシアの頭を、気がついたら撫でていた。触れられないなんて些細な問題だった。

フェイトに似た少女ではなく、ご主人様の姉君ではなく、ボスの大切な娘ではなく、アリシアというひとりの女の子を救いたいとはじめて願った、昼下がりの出来事。

《アルフは、わたしの……ひぐつ、大切な……。……だからいなくならないで》
「うん、任せとけ」

この安請負は年長者の義務だと思う。もつとも、安請負にするつもりはないけれど。力がふつつつと湧いてくる。

くしやくしやの笑顔を前に、絶望はいつの間にか消えていた。



あれから一年の歳月が流れた。

あの転生者からもたらされた情報は、アリシアと相談して二人きりの秘密にした。

話したところどころでどうにかなるとは思わないし、過ぎた知識は破滅を招く。ぼくが何かに巻き込まれていることはほぼ確実だが、正体がわからないのだから対策の立てようがない。

余計な心配をかけたくないと言えどそれまでだけ……。

自分でもベストの選択だとは考えていない。実際、アリシアの説得は難航し、最終的に有事の際にはアリシアの独断で情報をテスタロッサ家に公開する権利を取り付けさせられたし。

でも、まあわがままを通すくらいは許してほしい。

フェイトには、プレシアの実験でおとなアダルトフォームになったと説明し、プレシアとリニス先輩には侵入者は排除したとだけ伝えた。フェイトにはともかく、プレシア達には嘘は伝えていない。相手の深読みをいいことにフェイトに対しての口裏も合わせてもらったし。

「あれ？　ねえ、アルフリー、十巻知らない？」

「今アリシアが読んでるよ。十一巻はぼくが読んでる途中」

《ごめんねー、フェイト。もうちよつと待ってねー》

「うー。……わかった」

あれ以来、他の転生者には遭遇していない。特に事件も起こらず、平和もいいところだ。

一年前のあの日、ぼくは『原作』がいつから開始されるのか、ヒロインたるフェイトがどのような物語を紡ぐのか聞かなかつた。単純に思いつかなかつたというのもあるが、思いついたところで聞いたかどうかは微妙だ。

テスタロッサ家はぼくの存在によって大きく変化した。ぼくじゃない『アルフ』がどのようなキャラクターだったのかは知る由もないが、転生特典なんてものはもっていなかったはずだ。

ぼくから見れば魔法も幽霊も同じ非常識で、この世界はこんなものなのかと納得するだけだが、この世界の魔法は超科学。幽霊はオカルトとして認識されている。これがきつと、この世界の世界観なのだろう。もしもアリシアの存在が確認されていなければ、物語は大きく変わっていたはずだ。『原作知識』が足かせになりかねない。

未来を知るのが怖いとか、この世界が『物語』になっってしまうんじゃないかという不安が皆無といえば嘘になるけど。

この一年でアリシアの蘇生呪文は基礎が完成し、後は細部を調整するのみとなつている。ぼくが実験体になる必要性もなくなり、生活に余裕がでてきた。

もちろん鍛錬は欠かしていない。フェイトは単体で魔導師ランクA A A + 並みの実力を誇っているし、ぼくと連携すれば病魔から解放され娘たちへの純粋な愛情によって覚醒した超^{スーパー}プレシアとだつて互角に戦える……かもしれない。あれは本当に理不尽な存在だから。

そんなぼくらが今何をしているかというと、M A N G A を読んでいます。日本が世界に誇る文化のひとつ。たとえばそれが異世界であろうとそれは変わらない。

この一年でますます遠慮のなくなったぼくはマンガやアニメを所望し、リニス先輩は見事にそれに答えてくれたのだ。前世で活字中毒患者だったぼくは正直なところ小説も欲しかったのだが、文字ばかりはアリシアとフェイトにはハードルが高いので今回は我慢した。

短いオノマトペやセリフの一言二言だけでも活字が体に沁みわたる感覚がしたけどね。くそつ、犯罪的だね！

管理外世界の文化が色濃く出るこういうものは規制が厳しいらしいが、リニス先輩は本当に有能だ。なんでも昔、アレクトロ社という会社にプレシアが勤めていたときに法律関連でひどい目にあつたらしく（その話をするときのプレシアの表情は般若が美人に見えるレベルだった）、それ以来リニス先輩ともども法律のグレーゾーンには『少しばかり詳しく』なつたらしい。……天才はこれだから。怪物を生み出す一助となつたアレクトロ社にはぜひとも文句を言いたい。

それはともかく、アニメはともかくマンガがバトルメインの少年漫画ばかりなのはなぜだろう。管理局の方針なのか、リニス先輩の趣味なのか……真実は闇の中だ。

ぼくとしては見えていないのをいいことに『波ー！』と両手を重ね合わせて何かを撃つ練習をするアリシアが見られて大変満足なのだけでも。成功したら教えてくれ。

ちなみにフェイトの場合はアニメの影響で埋めたドングリを屈伸運動で芽吹かせよ

うとこつそりアルトセイムの森の中で踊っていた。目撃した時は『萌え死』にの意味を理解したね。わかるよ、フィクションだとわかっていても試してみたくなったんだよね。うちのフェイトさんはマジで純情です。

そんなこんなで、いまテストロッサ家では日本ブームが起きていたりする。

《アルフ》

「はいはい」

アリシアの要求を受け、自分ではページをめくれない彼女の代わりにページを進める。

けして片手間と思うなかれ。確かに視線はマンガに集中しているが、きちんとマルチタスクでアリシアの言動にも注目しているのだ。日常生活で使用できてこそその身に着いた技術だよね。

三人——見方によっては一人と一霊と一匹——でフェイトの自室でのんびりまったりしていると、コンコン、と控えめなノックがなされた。これだけで相手が特定できてしまうテストロッサ家。リニス先輩くらいしかいない。

「どうぞで」

「失礼します。——フェイト、アリシア、それにアルフ。プレシアが呼んでいるので研究室まで来てもらえませんか？」

フェイトの許可を経て入室したりニス先輩は一礼した後、開口一番にそう言った。物語が、始まる。

「『ジュエルシード』？」

研究が安定期に入ったと言えば聞こえはいいが、要は行き詰ってきていたのだ。

理論はすでに完成している。その理論がくせもので、術式の起動に必要な魔力は人間の保有できる魔力量をはるかに超えていたのだ。腐っても神様のなせる技、ということか。

魔導師ランク『条件付きSS』を持つプレシアが『時の庭園』のバックアップを受けなくても必要量の半分にも満たない。目下の研究は、その魔力をどうやって確保するかということだった。

「ええ、ロストギアの一種で、膨大な魔力の結晶よ。本来は願望を叶える道具なのだけれど、今回重要なのはその膨大な魔力。つい先日、管理外世界九十七番、日本の海鳴市に落ちたことが確認されているわ」

《日本？》

アリスアの期待に満ちた問いかけはひとまず置いておいて、プレシアは説明しながら空中のモニターに『ジュエルシード』の資料を映し出した。

……これは、また。

「ニトログリセリンみたいなやつだな。本当に使えるのか?」

「ノーベルだつてダイナマイトを發明したでしょう? 安定器を外付けすれば魔力電池としての使用なら十分可能だわ」

なるほどね。ひとまず納得した。いつ暴発するかわからない危険物が散乱している海鳴市に在住の方々にはお気の毒だが。

「でもなんでわざわざ日本なんかにはばら撒いたんだ? いっそ事故に見せかけて回収していれば楽だったのに」

「失礼ね。あれは本当に事故よ」

表情からして本当みたいだが、事故が起こっていないければ『事故』が起きたに違いない。

「で、話はここからなんだけれど、あなたたち三人には海鳴市まで旅行に行つてきてほしいの」

「そんなでもって善意の旅行者がたまたま危険なロストギアの封印を行う、と。管理局に提出するまでに少しタイムラグが発生するかもしれないけれど、管理外世界だから仕方がない」

「そういうこと。ね、いいでしょう、お願い」

プレシアはウィンクすると、大仰な動作で手を合わせてぼくらを拜んだ。この一年で

プレシアの性格がだいぶはっちゃけた気がするが、天真爛漫なアリシアと純粹無垢なフェイトの母親だと思えば納得できる。むしろこちらが本来の在り方なのだろう。

「わかった。いこう、アルフ、お姉ちゃん……!」

母さん大好きっ子のフェイトには効果抜群だ! ぼくからしてみればもうすぐ還暦なんだから年を考えろと——ごめんなさい何も思っていないません。無詠唱即時展開で「プラズマザンバー」をセットするなんて非常識な真似しないでください。デバイスどころに出した。

^{スーパー}超 プレシアマジパネエ。

「え、えと、確認しておくべきことがいくつかある。拠点と身分証明書は?」

「……ふん、まあいいけど。拠点は海鳴市郊外にマンションを用意したわ。パスポートも発行済みよ」

フェイトには戸籍がない。以前は人形扱いされていたため、今は注目を集めないため仕方がなく。おそらく用意されたパスポートの『フェイト・テストアロツサ』とプレシアの娘フェイトは別人ということになっているだろう。

死者蘇生は禁呪だとかいう問題ではない。悟られるわけにはいかないのだ。いまプレシアが用意しているのはアリシア専用だが、死んだ人間をよみがえらせる方法が理論として確立しているのは事実なのだから。亡者どもを寄せ付けないために、フェイトと

アリシアに幸せな人生を送ってもらうために、誰にも知られるわけにはいかないのだ。

だがこういうときには便利なのも事実。プレシアとリニス先輩では注意をひいてしまふ恐れがある。条件付きとはいえ、プレシアは魔法世界に数パーセントしか存在しない魔導師ランクSSの実力者なのだから。管理外世界とはいえロストギア事件に前後して渡航していれば関連付ける人間も出てくるだろう。

……前から気になってはいたんだけれど、交易のないはずの向こうの通貨をどうやって取得しているんだろう。藪をつついて蛇を出す趣味は無いので聞いてはいないが。

ちなみに、すべてが終わったあと、フェイトとアリシアを学校に通わせる計画は着々と進行中だとリニス先輩から聞いた。本当にプレシアに法律の勉強をさせる原因になったやつらには猛省を促したい。

「二十一個全部集める必要はあるか？」

「理論的限界値でも最低三個は欲しいところね。余裕を見積もって五個、実験とか調整に使うことを考えると十個あるとありがたいわ」

「多ければ多いほどいいってことね、了解。ところでジュエルシードを電池として使用後、返却って可能なの？ なくなったりしない？」

「それは大丈夫よ。ジュエルシードは魔力結晶であるとともに願望の器。魔力を使いきったところで器は残るわ」

「器しか残らないんじゃないの、それ……？　ま、いつか。じゃあ次、『お願い』の性質上、連絡を密にするってわけにはいかなと思う。単刀直入に聞くけど大丈夫？」

「ぴし、とプレシアのすべてが止まった。壁際でぼくを見守っていたリニス先輩がそつと歩みより、その肩を抱く。」

超^{スーパ}プレシアの欠点、それは娘成分を定期的に補給しなければならぬということ。

「アリシア、仮にも母親なんだから無視しないで、《やっぱリアキバにはいかないな》とか心底うれしそうに旅行の計画立てない。『遊びに行く』のだけど、遊びに行くんじゃないんだよ。でもアキバは賛成だ。前世ではなんだかんだいって行く機会に恵まれなかったからね。」

「だだだだ、大丈夫よ！　可愛い娘たちのためですもの、耐えてみせるわ!!」

《うーん、やっぱりわたし、残ろうか？》

「あ、アリシア……!」

「アリシアが残ってもアルフはフェイトについていくでしょうから、結局話せませんかからねー。私はついていくべきだと思いますよ?」

「り、リニスウウウウ! ……ええ、ええ、そうね。アリシアは旅行楽しんできて。お土産、たのしみにしているから」

めつつや震えとる。血涙流してまでいうことかい。

本当は行かせたくないんじゃないかと思うほど旅行の注意事項や禁止事項を並べてるプレシアを放置して（本音は考えるまでもない）、『日本に行く』という事実には思いをはせる。

久しぶりの里帰り。いや、たぶんぼくのいた世界とは別のパラレルワールドだろう。ノーベルはダイナマイトを発明し、ノーベル賞の元を創り上げたのは同じでも、ぼくの世界には魔法なんてなかった。

『原作』の名前は『魔法少女リリカルなのは』。主人公の名前も『なのは』だと聞いた。そしてプレシアが関与するまでもなく日本にばら撒かれたジュエルシード。

『原作』が始まったとみて、まず間違いない、かな？

もしもそうなら転生者に会おう可能性は飛躍的に跳ね上がるだろう。命の危険にさらされる場面が何度もあるかもしれない。

様々な思いが渦巻き、やがて一つの言葉になる。それは、ここからのぼくの覚悟を示すのに、妙にふさわしい気がした。

何故か懐かしい気もするその言葉を、ぼくは心の中でそつとなぞる。

相手が神であれ悪魔であれ魔法少女であれ、『うちの子においたするやつは、がぶつといく』からな。

先行公開 『沁み渡る活字と車椅子の少女』



見守るのは車椅子に乗った少女。座ったままでは届きそうで届かない位置にある本に目をつけたのか、うーんと手を伸ばしては、ため息をついて車椅子に座り込んでいる。……助けた方が、いいのかな？

いや、勘違いしないでほしい。ぼくだって正直なところはすぐさま駆け寄って「はい、どうぞ、これですかー？」とやりたいのだ。

でも考えてしまう。ここは図書館、公共の場だ。こんなところで助けられて、恥をかかされたと彼女は思わないだろうか。少し見ていたが、彼女の車椅子捌きはなかなかのものだった。昨日今日足が不自由になったわけではないのだろう。迂闊に手を出すのはむしろ迷惑かもしれない。下手に同情ととらえられるとお互いにとって不幸な結果を招く。相手の気持ちも考えずに助けたいから助けるのは、むしろ害悪なのでは……。

だいたい、ここは図書館だぞ。身体が不自由な利用者が困っていたら、職員が助けるのが道理じゃないか。施設はそこそ立派だが、職員の質が低いのか。八つ当たり気味

にそんなことを考える。職員は仕事だから大手を振って手助けが出来るんだな、うらやましい。

さつきから彼女とぼく、二人しかいない室内で延々と考え込んでいるが（今日は平日）、さらっと話しかけてさらっと助けるなんて高等技術、コミュニケーション能力赤点のぼくは所持していない。

転生特典でなんとかできないだろうか。コミュニケーション能力が欲しくて求めた【以心伝心】に性格改変の効果はないし。あつたら困るが。それならむしろ【明鏡止水】だが、あれで一般人に話しかけるのもためらわれる。

「あの一、見とるんやったら助けてくれませんかー?」

あんまりまじまじと見過ぎたのか、少女のほうから話しかけてきた。黒に近い茶髪のショートカットが振り向きざまにさらりと揺れる。しまった、何も言わずにじつと見ている方が失礼じゃないか。久しぶりの『他人』に、対処がわからなくなっていたらしい。「よかった。助けていいんですね」

「はー?」

しかし、ジレンマにとらわれていた先ほどまでよりは何倍もマシだ。心持ち微笑を浮かべながら近づき、少女の横から身を乗り出してお目当てだろう本を手に取る。『きれてるロールケーキの冒険 E X T R A 2』何これ、まるでタイトルから内容が予想付か

ないんだけど。ものすごく気になる。今度暇になった時に読んでみたい。

「はいどーぞー。こちらでよろしかったでしょうかー?」

「は、はい。おーきに」

やりたかったことをやれたスッキリ感で必要以上に丁寧になりながら本を少女に渡す。正面から見たら思っていたよりも幼い。フェイトと同じくらいだろうか。雰囲気がいっしょかりしていて気付かなかった。ぼくの意味不明な対応に戸惑いを表情に隠し切れていない。

……しまった。またやってしまった。気まずい空気が室内に満ちる。

「あの、聞いてもえーですか?」

「は、はい。どうぞ」

沈黙を打ち破ったのは少女の方だった。何を聞かれるんだろう。答えられることならいいけど。久しぶりに胃によどみが溜まるのを感じる。懐かしい他人と接するときの感覚だ。

「なんでわたしのこと見とったんですかー?」

「え、えーと……。困ってるのかなー、助けた方がいいのかなー、でも下手に助けた方が迷惑なんじゃないかなーとひとりで煮詰まっています」

すこし迷ったが結局正直に答えた。他に何を言えばいいのかもわからなかったし。

『煮詰まる』って辞書的な意味ではこの使い方は間違いだっけ。いまはどうでもいいや。「ちらちら見とると思っただらそんなこと考えてはったんですか?」

「は、はいー」

自然と肩が狭まる。やはり不愉快な気持ちにさせてしまっただろうか。

「……ふふ、あはは。あー、おかし。そんな格好してはるからもつと怖い人かと思つてましたわ。かんにんなー」

「い、いいえ」

何故ぼくが謝られているのだろう。理解が追い付かない。ただ、ひとつ安堵出来ることはどうやら彼女は怒つてはいないらしい、ということか。

ちなみに服のコーディネイトはアリシアだ。《アルフはもとがいいんだから》と言いながら、ぼくが耳や尻尾を出していても帽子の一部やアクセサリーだと思われるような服装を選択してくれた。

というわけで今の格好はニット帽に半袖のジャケット、サングラスにホットパンツといったもの。上手く走れないのは死活問題なので、底の厚いブーツは勘弁してもらった。ペルタは銀の首輪型の待機状態で標準装備。

子供の一人歩きは物騒なので、外を出歩くときはおとなアダルトフォーム人間モードを通して見る。なんかすれ違う人から視線を集めて心臓に悪いんだけど、自分ではどのように見

えているのかよくわかんない。鏡を見ようとぼくのファッションセンスはゼロだからなあ。

笑いをおさめた彼女は本を胸に抱くと、丁重に一礼した。

「失礼しました。わたし、八神はやていいます。さつきは助けてもらってほんとーにありがとうございました。おねーさん、お名前は？」

「アルフ。アルフ・テストアロツサ。今日海鳴市に来たばかりの、ストレンジャー旅行者です」

パスポートに記名された名前を名乗る。現地住民との交流が、こうしてよくわからないうちに始まった。

……ん？ 『はやて』、どこかで聞いたような。



ときは少しさかのぼる。

「日本よ、ぼくは帰ってきたー！」

「……どうしたの、アルフ？」

「ん、いやなんか、言わなきゃいけない気がして」

《大丈夫？》

そんな真顔で心配されるような態度だっただろうか。自分でも少し心配になってきた。ほんの冗談のつもりだったんだけど。

プレシアの『お願い』からはや五日。正式な手続きを踏んだがゆえに時間がかかってしまったが、大手を振って合法的にこの海鳴市の地を踏むことが出来た。

単なる旅行者が現地での魔法使用許可とデバイスの持ち込み許可を得るのにあれだけの書類を書くはめになるなんてね。ま、考えてみれば書類だけで済むのが驚異的か。管理外世界へのオーバーテクノロジーの持ち込みに対し、管理局はかなり神経質だし。「さて、じゃあタクシーでも拾ってマンションに行こうか。ジュエルシードの探索は明日からってことで」

「え、でも……」

「全部で二十一個もあるんだ。及第点が五つで、目標合格ラインは十個。どう考えても長期戦になる。こういう場合は拙速よりも巧遅。初日は拠点の確保に費やすべきだよ。きちんと休めないよ、発揮できる実力も発揮できなくなるんだから」

長時間の渡航に対しフェイトは疲労の色を隠し切れていない。肉体的な疲労とは無縁なアリシアも、気疲れはあるようだ。子供にとつて長距離の移動は強いストレスをかけ体力を奪うもの。今日はもう休ませてあげたい。

ホテルじゃなくてマンションだから、自分たちである程度準備をしなきゃいけないの本当だし。向こうでリニス先輩が用意してくれた家具一式を、デバイスの中から取り出して設置するだけなんだけどね。デバイスの収納力ってどうなっているんだろう。

封印済みのジュエルシードを保存管理もできるらしい。某青いネコ型ロボットのポケットを思い出すな。

管理人さんや隣人に挨拶回りにいかなきゃいけないのが気が重いけど。ぼくが挨拶するんだよな……。ちなみに今のぼくはおとな^{アダルト}なフォーム人間モード。こつちにいる間は常にその姿でいるとプレシアに念押しされた。ぼくとしても保護者不在と目をつけられるのは嫌だから異論はない。フェイトもアリシアも可愛いから、変な奴が寄つてこないようにぼくが守らないとね（アリシアは普通の人には見えないが）。

「でも……」

《アルフリー、フェイトー、注目集めちゃってるよー?》

「おっと、そりゃいけない。ほら、行こう、フェイト」

旅行者として不自然にならない程度の大きさのバックパックを背負い直し、フェイトの手を引いて半ば強引に歩き出す。荷物の大部分はデバイスの中に収納しているわけだけど手ぶらだと怪しまれるし、人目のあるところでデバイスから出し入れするわけにもいかなないので必要最低限の着替えや食料などはこの中に入れてあるのだ。

大好きな母さんからの頼みをできる限り早く完遂したいみたいだけれど、あの人はフェイトが無茶して倒れたら絶対泣くぞ。もちろんその前にぼくをポロ雑巾に変えてから。ここにいる間は多少強引にでもフェイトに定期的な休憩を取らせなくては。

それにしても、言い合いはやめて移動を始めているのに周囲の視線が絶えない。やっぱりフェイトの金髪やぼくの赤毛が目立つんだらうか。この国は単一民族国家だからな。それにしても、ぼくが知っているのよりは染色ではなさそうな黒以外の頭髮が多かった気もするけど。やはりパラレルワールド、か。

まあ、うちのフェイトさん可愛いですからね。フェイトの趣味とアリシアの見立てで用意された黒いワンピースを身にまとったその姿は、シンプルながら光り輝いて見えます。後光が差して見えるレベル。

「みんな振り向いてるな。誇らしいけど保護者としては微妙な気分だ」
《フェイトだけじゃないと思うけど……》

「うん」

「え？ アリシアは見えないだろう」

《……バカ》

なんだか姉妹そろってあきれた視線を向けてくるんだけど、変なこと言っただろうか。



海鳴市郊外のマンションに到着し、挨拶回りを終え、荷物を整理し、あり合わせで昼食を済ませ、といろいろしているうちに壁にかけた時計の針は午後一時を指していた。

膝枕をして頭を撫でているうちに眠ってしまったフェイトをそっとベッドの上に運ぶ。どのような経緯でそんな状況になったのかは秘密だ。

続いてデバイスからお洒落な肩掛けカバンを取り出す。普段の生活で大きなバックパックは背負うなどアリシアに持たされたものだ。

「ふう、ちよつと出かけてくる」

《いってらっしゃーい。どこいくの?》

「図書館。ついてくる?」

《んーん、おるすばんしとく》

アリシアはさつきからテレビにかじりつきだ。日本のテレビ番組はとても面白いらしい。視力が低下するかはわからんが、一時間ごとに十分の休憩いれろよ。

フェイトは眠っているので机の上にメモでも残そうかと思つたが、それよりもっと確実に多くの情報が残せる方法があるのを思い出した。

「バルディツシュ、フェイトに伝言を頼む」

「〃——Yes〃」

「郷に入つては郷に従え。ここにいる間は日本語で話すように」

「〃……了承した。アルフ、伝言を〃」

無愛想な声で返答したのはフェイト専用インテリジェントデバイス『バルディツ

シユ』。別に不機嫌というわけじゃなくこれがコイツのデフォルト仕様である。リニス先輩が創ったのに、どうしてこんな性格になったのやら。

日本語を指定したのに特に深い意味は無い。せいぜい、ミッド語だと耳につきやすいからというくらい。待機状態だとエンブレム、起動状態だと斧槍のこいつが喋っていることを他人に認識されたらどのみちアウトだけど。

「図書館にいつてくる。五時までには帰る。『戸締り』はしていくのでうかつに部屋からは出ないように。ぼくは自分でここまで帰ってくるから外から呼ばれても開けちゃだめだ。アリシアもだ。外には出ないように」

《はいはい、わかってるって》

一瞬だけテレビから視線をはずして手をひらひら振るアリシアがとても不安だ。やっぱり連れて行った方がいいだろうか。

ぼくがこれだけ警戒しているのは転生者の存在だ。もしもこのマンションが『原作』に出てきていたらフェイトに対してよからぬことをたくらむ輩がやってくる恐れがある。だからといって原作知識のないぼくはこの情報が『原作』にあつたかどうか知ることが出来ない。この場所を用意したプレシアとの関係が変わっている以上、『原作』のフェイトがどのような形で日本に滞在していたのかまるで予想ができないのだ。もしかしたらぼくが転生者から逃れようと用意した別の拠点こそが、『原作』のフェイトの拠点

だつたりするかもしれない。

ならば下手にかわそうとせず、覚悟を決めて『戸締り』するしかない。心配性のマツドサイエンティストが、愛する娘たちのために魔法、超科学、ブービートラップを芸術的なバランスで組み合わせたホームセキュリティを起動させる。初見でこれを潜り抜けるのは、その方面の転生特典をもった転生者^{チート}くらいだろう。それ以外の侵入者には円満な余生を諦めてもらおうか。

「バルディツシユ、ぼく以外の何者かが侵入してきた場合、フェイトを起こして「サンダースマツシャー」でもたたき込んでやれ。ただし第一目標は撃退ではなく逃亡だ」

「了解した。任せておけ」

こいつは無愛想だが、フェイトに対する忠誠心は大したものだ。その一点に関していうのならぼくは疑っていない。にやり、と思わず共犯者に向ける笑みを浮かべてしまった。

「〴〵以上か？」

「うーん、そうだなー。じゃあ追伸で、『今日から三日間は慣らしに使うから戦闘行動は原則禁止。万が一戦闘が必要な時はぼくが請け負うから、異論があるなら帰るまでに反論のロジックを組み立てておけ』と伝えといて」

急激に酸素濃度が変われば体調が崩れるように、世界が変われば魔力素の濃度や構造

が微妙に変わり、人によっては不適合を起こして体調を崩す恐れがあるのだ。数日も大人しくしておけば勝手に身体が適合するのだが、その数日の間に戦闘などの激しく魔力を消費する行動を行えば下手をすれば行動不能までに陥る。

オールレンジ対応であるがゆえに魔力の消費が比較的多いフェイト。クロスレンジがメインであるがゆえに魔力消費が少なく済むぼく。体調を崩した時の低下する戦力のことを考えても、ぼくが前面に出るのは当たり前だった。

「——了解した」

「じゃ、いつてくる」

アリシアはもう一度いつてらっしゃーい、と声をかけてくれたが、寡黙なバルディッシュからの返答は無かった。こちらも期待していないのでそのままドアを閉じる。

さーて、図書館、としよかん♪

浴びるように活字を読みたい。文章に浸りたい。

いや、誤解しないでほしい。趣味嗜好が入っていないわけではないが、これからのことに必要な行動でもあるのだ。小さいところならともかく、市立や県立図書館になると市役所並みにその町の情報が手に入る。パンフレットは自由に持ち帰ることが可能だし、過去の新聞もまとめて読める。無料貸本屋などと揶揄されることもあるが、あそこは本当に知識の宝庫なのだ。

マップの作製はこの町でジュエルシードを探そうと思うならやっていて損は無いし、ジュエルシードがもう暴走を始めているなら新聞に載るような事件になるだろう。時間に余裕があれば過去の伝承なども調べたい。こちらは直接ジュエルシードの探索につながることは無いが、余計な危険をおかさないために必要な処置だ。

事前知識では発見できなかったとはいえ、魔法少女や狼少女や幽霊少女がここにいるのだ。管理局が発見できていないだけでこの世界特有の魑魅魍魎がいるかもしれない。転生者だけで手一杯なのに、余計な敵はつくりたくない。

交通機関を利用して良かったが、海鳴市の雰囲気や身体能力があつてこそこのこのタイムで、普通の人間だったら倍では済まないかもしれない。目立つような無茶はしてないよ。

海があつて、山があつて、丘があつて、活気のある商店街があつて、山を越えた向こうには温泉街まである。……なんでこのレベルの中小都市なんだろう。そこそこ豊かに自然が残っているのはいいことだけど。おかげで多くの動物に接触でき、「以心伝心」および鞆の中に入れていた食料による餌付けで情報提供者を得ることが出来たのはありがたい。

ミッドチルダの野生動物ほど知能は高くないにしても、猫ネットワークも鳥ネット

ワークも馬鹿にしたものではないのだ。

ひそかに期待していたのだが、さすがにジュエルシードをばったり見つけるなんてことはなく、図書館についたあとはマルチタスクをフル活用して情報収集に望んだ。

つくうー、こんなことなら速読でも習得していればよかった。時間がいくらあっても足りない。何時間でも過ごせてしまふ。ミッドチルダ語も嫌いじゃないんだけど、やっぱり日本語は綺麗だよ。こんなこと、前世では考えたこともなかったけれど。

『おいしい海鳴市』なんていう料理のパンフレットも手に入ったから、早めに切り上げて商店街で買い物して帰ろう。料理の基本はリニス先輩からきちんと習っているし、日本の家庭料理をフェイトに一度食べさせてあげたい。アリシアは……ごはんにお箸でも突き立てておけばいいか。

あつというまに時間が過ぎ、現在午後の三時。四時になったら切り上げて、商店街に向かうとして――。

情報収集の結論、この町にはすでにジュエルシードの回収を行っている存在がいる。また、ジュエルシード事件の情報隠蔽を行っている勢力も存在している。前者と後者が同一かは不明。

根拠は二日前のとある新聞の記事。動物病院にトラックが突っ込んだという事件。幸い死傷者はでなかったとあったが、どうもこれがジュエルシード事件くさい。並行し

てそれらしい事件を調べてみたのだが、被害の規模はガス爆発もかくやというものだったし、加害者側となるトラックの会社もたどり着くことはできなかった。おそらくは、存在していないのだろう。

使い魔の演算能力ゆえか、前世の時よりもインターネットを通じた情報収集がはるかにはかどった。前世は英語のできない文系だったからなー。魔法は理系科目である。——実はインターネット設備があるのか危惧していたのだが、ちゃんと完備されていた。道行く人のケータイ電話がぼくの知っているものより数世代古かったから、けっこうドキドキしてたんだよね。どうもぼくが死んだ前世より、西暦が三年ほど昔みたいだが、今はどうでもいい話だ。もとよりパラレルワールドだし。

とにかく、異相対化したジュエルシードが放置されているなら、被害はもつと出ているはずである。しかしジュエルシードがらみを思わせる被害はその一軒だけ。つまりはそのジュエルシードは回収されて、さらにはその個人ないしグループはジュエルシードを封印可能なほどの膨大な魔力と広域結界を展開できるだけの魔法知識を持っている。

第一容疑者は『ユーノ・スクライア』。若干九歳にしてジュエルシード発掘の責任者に任命されていた天才。……これはミッドチルダ全体で言えることなんだけど、子供になにやらせているんだ。実力主義社会はともかく、せめて責任は大人が背負ってやんな

きやだめだろう。じゃないと何のための大人だ、何のための年月だったことになる。そもそも管理局が子供をガンガン採用しているっていうのが突っ込みどころ満載なんだけど。百年近くの伝統を誇っておいて、未だに次世代育成のいろはもできていないのかい。組織としては致命的だろう。

閑話休題。

彼は責任を感じたのか、ぼくらよりも数日はやく指定遺失物ロストギアの探索という名目で現地入りを果たしているという情報が入ってきている。デバイスの持ち込みや魔法使用の許可も取っていたらしいから、何かしらの形で関係していることはほぼ確実だろう。……止めろよ、スクライア家。ぼくらが違法行為すれすれの活動をしているということをおわきに置いてもそう感じる。個人的には好感が持てるが、それはそれとして無謀だろう。せめて何人か付き添ってあげて。

第二容疑者は『なのは』。詳細は不明だが、『原作』の主人公である『魔法少女』。ユー・スクライアに現地での影響力があるとは思えないから、おおかた高い魔力素養をもった現地協力者を即興でスカウトしたところか。彼女には情報隠蔽をした存在とつながりがある、もしくは当人である可能性がある。まさかトラックもないのにトラック事故が起きた摩訶不思議を隠蔽した存在が、何も知らないということは無いだろうから。彼女つながりでユーノがその方面でも現地協力者を得たと考えるのが一番妥

当か。

ちなみに、この世界特有の力を持った存在に関してだが、めぼしい情報は見つからなかった。せいぜい数百年前に封印された化け狐の話とか、最近のものでは都市伝説並みに信憑性の低い超能力者、幽霊、吸血鬼の話とか……。それが情報操作の結果という可能性もあるが、さすがに現状では確認しきれない。狼人間の話もあつたけど、「ここにおるぞ！」と叫ぶべきだろうか。まあ、現状はまるつきり嘘と断じることとはできない、という程度か。

「んー……」

手に入った情報を整理し、吟味する。このあと三日間は情報収集についてやすつもりだ。マッピングを済ませ、区画ごとにローラー作戦で潰してゆけば時間はかかるがほぼ確実にすべてを回収できる。時間はかかるといってもここは管理外世界。管理局が重い腰を上げて介入するまでには終わるだろうし。それこそジュエルシードが暴走して次元震発生、近辺を巡回中だった巡航船が飛んでくるなんてことがない限りは。

不確定要素はやはりユーノと『なのは』か。先に回収されて必要数が足りなくなったり、万が一競争、敵対なんてことになったら面倒だな。最悪、広域結界を展開して相手呼び出し、交渉することも手段の一つに考えておくか。

「うーん、うーん……」

気がつけば、ぼく以外にも唸っている人間がいた。

車椅子に乗った小柄な少女。届きそうで届かない本に手を伸ばす懸命な表情は、フェイトには及ばないまでもけっこう可愛かった。

ごくり、と喉が鳴る。

やっかないことになったかもしれない。



そして今に至る、というわけだ。

「そーですか、妹さんが……」

「はい、だから自分ではどのように見えているのかわからないんです」

「かつこええですよー。あとそれから、わたしに対しては敬語でなくてもええです。アルフさんの方が年上なんやし」

思った通り厄介なことになっていた。いや、予想していたのとは少し方向が違うが。

あの失礼な態度のどこが琴線に触れたのか、八神さんはにこにこ話しかけてきてくれた。その流れで何故か、今一緒に商店街に向かっている。『商店街にいかはるんですか？ いいお店しつとりしますよ。一緒にいきませんかー』なんて言われて、断るだけの勇気はぼくにはなかった。

うう、八神さん、のんびりおつとりしているようで、案外押しが強いよ。しかもそれ

が雰囲気でも緩和されていて、相手に悪い印象を与えにくい。うらやましい限りである。

この肉体の年齢は二歳だから八神さんの方が年上だと思うよ。確かに見た目はお酒やたばこを購入しても怪しまれなくらいに見えるけど。精神年齢はさすがに年上だと思うが、前世の分を単純に現在に足すことが出来るというわけでもないので微妙だ。肉体に引きずられているところもあるし、そもそも一度死んだことでリセットされて、前世の記憶は独立したデータとして継続されているような感がある。人格構成や趣味嗜好に多大な影響を及ぼしてはいるが、前世の人間とここにいる狼少女はやはり別人なのだ。

「すみません、努力はしてみますが、まだ日本語には慣れていないもので……」

かろうじて嘘ではない。この体で日本語を話すのは今日が初めてだ。本当の理由は相手が年下の少女だろうが、知りあつて間もない相手にくだけた口調を使うのがためられるなんていう情けないものだけだ。

「そっかー、残念やわー。ならせめて、わたしのことは名前で呼んでくれませんかー？」
「えと、はやて、さん？」

「はいなー」

につっこり笑う少女を見ると、名前で呼んでよかつたなと安心する。精神年齢はともかく、対人スキルでいえばはやてさんの方がはるかに上のようにだった。

「あれ、はやて？ 奇遇だな」

「げ、高天原……」
たかまがはら
しんじ

「神治でいいっていつも言ってるだろう」

曲がり角を曲がったところでばったり男の子と出くわす。そこそこ整った顔立ちによく映える、白いお洒落な制服を着ていた。たしかこの近くの私立聖祥大付属小学校のものだ。初等部のみ共学で、中学からは女子校なんだっけ。フェイトがいるからその方面の下調べはバツチシである。

上から見下ろせる限り、はやてさんの表情は混沌としたものだった。苦手意識を抱いているようでいて、意識している男子にばったり出くわしてしまったかのような。プラスとマイナスが複雑に入り混じっている。

そんなことに相手の男の子は気づいた様子もなくうれしそうにはやてさんに話しかけていた。うん、やっぱりどこの世界でも男の方がガキなんだな。

「なにしてんだ、こんなところで。どっか行くのか？ だったら一緒に——」

そこでもうやく、はやてさんの車椅子を押すぼくの存在に気づいたらしく言葉が止まる。何か信じられない物を見たともいうように、ポカンと口が開いた。

「は？ アルフ……？」

——こいつ、転生者か。

内心、警戒レベルを最大値まで引き上げる。覚悟していなかったわけじゃないけど、まさか初日からエンカウトするとは。やはり海鳴市が物語の舞台なのか？

「アルフさんはさつき図書館で知りおうた人や。もしかして、顔見知りなんか？」

「い、いや……。知り合いに似ていると思っただけど気のせいだった。」

はやてさんの表情は相変わらず複雑そうだった。形のいい眉がしかめられてしまっている。不自然極まりない言い訳に納得していないみたいだったが、うかがうような彼女の視線にぼくが首を振って知り合いでないことを答えると、とりあえずそれ以上の追及はなかった。

「俺の名前は高天原神治っていうんだ。よろしくな、アルフ！」

喉元過ぎれば熱さを忘れるというか、さきほどの狼狽をあっさり捨て去ってぼくに笑いかけようとする高天原くん。——その瞬間、最大値で勘が危険を告げた。反射的に【明鏡止水】を起動させる。

タツチの差で彼の頬笑みが完成し、なんとも言えない気持ち悪い感覚がぼくの中を通り過ぎていった。はやてさんが息を飲むのを感じる。なんだか頬が赤いような——ぼくの頬も赤くなっている。心臓がバクバクいつている。滾々と湧きだしてくる感情は、【明鏡止水】の効果ですみやかに鎮静化された。なんだこれ。

病気？ 何をされた？ 今までに体験したことのない感情、正体不明。あの気持ち悪

い感覚はおそらく神力——転生特典の根源となる力。勝手に命名——だ。他人のアクティブタイプの能力が作用するとあんなふうに感じるのか。

「つ、ちよつと、いきなり失礼やでー」

「べつに大丈夫だよな、アルフ？」

「……少しびつくりしました」

表情筋を動かして笑みを形作る。上手くいかなかったみたいで、高天原くんの肩がビクツてなった。うーん、今度から「明鏡止水」発動中に上手く表情を作る練習もしなくちやな。

謎の感情は未だにぼくの中で暴れている。しかし、「明鏡止水」のおかげでそのことは「理解」しても、その感情が行動に影響を及ぼすことはない。笑顔をトリガーに相手に特定感情を植え付ける能力、か？ だとすれば能力の相性がよかった。でも、先制攻撃をまともに受けた事実是不変わらない。

「あ、あれ……？ そ、そうだ。急用があつたんだつた。どこにいくのかは知らないけれど、またな！」

予想された反応とは違つたらしい。想定外の事態に、相手は撤退を選択した。慌ただしく遠ざかってゆく背中を見送つて、はやてさんの肩から力が抜ける。一見、苦手な相手から解放されて安心したみたいだけれど、薄紅色の頬、うるんだ瞳、八の字に下げら

れた眉はまるで愛しい人の背中を見送る少女みたいで——。

ああ、わかった。この感情の正体が。いろいろ思い出した。

これは『恋』だ。あいつの転生特典は笑顔をトリガーに相手を魅了する能力なのだ。いやらしい手を使ってくる。よくそんなこと思いつくもんだ。『傾国の美女』なんて言葉もあるとおり、恋愛感情は自分の思う通りにならない癖に国ひとつ傾けるほどのエネルギーを発生させる。自分の感覚からいって効果が恋愛感情を相手に抱かせるまでのみという点を鑑みるとかなりリスクの高い搦め手だが、やられる方にとっては堪ったものではない。

『はやて』の名前もどこで聞いたのか思い出した。あの銀髪オツドアイの転生者がこぼした原作キャラクターの名前だ。

「……はやてさん」

「な、なんやつ——しもた、なんですか?」

「図書館に忘れ物をしていたのを思い出しました。走って取ってくるので、五分ほどここで待っていてくれませんか?」

「べ、別にええですけど……」

はやてさんの表情に走るのは……おびえ? 【明鏡止水】使用中は表情が消えるから

な。今までは主に戦闘中にしか使わず、周囲に身内しかいなかったので考えが及ばな

かったが、早急になんとかするべき問題だな、これは。

「怒ってはるんですか？ 確かにあいつは、あまりいいやつやないですけど……」

「好きなのですか、彼のことか？」

「ちや、ちやいますよー！」

顔を真っ赤にして手を振るはやてさん。微笑ましいと数分前の自分なら思っていただろうが、今は気持ち悪さと憤りしか感じられない。それらは【明鏡止水】の効果で心の奥に沈められ、ただの情報となる。なんであんなやつに、という自己嫌悪が彼女の表情に混ざっている気がするのはぼくが気持ちが悪くが反映されているだけだろうか。

はやてさんを毒牙にかけ、ぼくを魅了しようとしたあいつが、原作キャラたるフェイトと同じことをするのにためらう理由はないだろう。それに、今は恋愛感情だけが、時間が経つにつれ悪化しないという保証はない。不確定要素を残したまま、アリシアとフェイトのもとに帰る気にはさらさらなれなかった。

ばちゅつとやつちやいますか。

「大丈夫、すぐ帰ってきますから。ね？」

「は、はいー」

かくかくと人形のように頷く彼女に背を向けて走り出す。走る先は図書館方面。あいつは自分が来た方向に帰っていったから、真反対だ。はやてさんのほつとした雰囲気

が伝わってきた。

【明鏡止水】はパッシブタイプのため使用を続けることに負担はないが、今もなお内心で自己主張を続ける恋心を無理やり植え付けた相手がのうのうと過ごしているという事実は耐えがたいものがある。恋心も怒りも嫌悪も、等しく情報として処理され心はすぐ風ぎに戻されるのだけだ。

乙女の初恋を踏みにじったんだ。覚悟はできているのでしよう。

ぼくがミリ単位で空間把握が出来る範囲は最大で自分を起点に半径百二十五メートル。魔法の強化^{バフ}なしでも半径五十メートルなら堅い。いずれも空ではあつという間に通り過ぎてしまう距離だが、陸、とくに市街地ではまあまあの距離と言える。

ペルタさえ起動出来れば、即殺が可能だ。不意打ちを重視して結界は限界まで張らない。相手が他にどのような転生特典持っているかわからない以上、気づかれる前に一撃で終わらせる。

図書館方面に走り、はやてさんの視界から消えるや否や軌道を変え目標の追跡に移る。臭い、音、まず逃がすことは無いだろう。

「——ペルタ、セットアップ」

人目の死角でデバイスを展開するぼくは、まさしく狼^{ハンター}だった。